

博士論文（要約）

日本統治期台湾における近代彫刻史研究

鈴木恵可

博士論文
日本統治期台湾における近代彫刻史研究

目次

序章	1
(一) 本論の目的	
(二) 先行研究の検討とその課題	
(三) 用語の整理	
(四) 本論文の構成	
第 I 部 近代公共空間における〈彫刻〉の登場	15
第一章 〈銅像〉の登場—日本統治初期における日本人長官像の建設	16
はじめに	16
第一節 長沼守敬《水野遵像》(1903 年)の建設—台湾最初の銅像	
(一) 《水野遵像》の設置過程	
(二) 彫刻家・長沼守敬(1857-1942)と台湾の銅像	
第二節 《児玉源太郎像》(1907 年)—西洋彫刻像の登場	22
(一) 児玉像建設の発議	
(二) 台北新公園の児玉像	
(三) 台中と台南における児玉像の設置	
(四) 高雄の児玉像	
第三節 大熊氏廣《後藤新平像》(1911 年)—内地から植民地台湾まで	29
(一) 台北新公園の後藤新平像	
(二) 中南部における後藤像の設置	
第四節 《樺山資紀像》(1917 年)—基隆駅前の総督像	31
第五節 日本統治初期における大型銅像建設事業と辜顕栄(1866-1937)	34
小結	39
第二章 台湾統治視覚化の諸表現—記念碑から銅像まで	40
はじめに	40
第一節 大熊氏廣《台湾警察官招魂碑》(1908 年)	40
—日本統治初期の台湾における慰霊とモニュメント	
(一) 《台湾警察官招魂碑》の概要	

(二) 大熊氏廣と明治日本のモニュメント	
(三) 《台湾警察官招魂碑》建設の歴史的背景と設置空間	
第二節 岡田三郎助《台湾総督府壁画》(1919年)と北白川宮能久親王の顕彰	57
(一) 北白川宮の神格化と美術作品による記念行為	
(二) 岡田三郎助作《台湾総督府壁画》の完成まで	
(三) 作品概要—下絵及び写真図版からの検討	
(四) 岡田三郎助の壁画制作と《台湾総督府壁画》の位置	
第三節 新海竹太郎《児玉・後藤像》(1915年)と記念館建設	69
(一) 「児玉・後藤記念館」建設の発起と経緯	
(二) 彫刻家・新海竹太郎と台湾および北白川宮との関わり	
(三) 新海竹太郎による台湾の銅像制作	
第四節 北村西望《樺山資紀像》(1935年)	
—始政四十周年記念事業におけるモニュメント建設	76
(一) 始政四十周年記念としての銅像と記念碑建設	
(二) 北村西望と戦前期外地の銅像制作	
小結	84
第三章 日本統治期台湾の公共空間と銅像	87
はじめに	87
第一節 銅像建設事業とその関連法令—日台の比較から	
第二節 銅像の建つ場所—日本統治期台湾の公共空間	94
第三節 公共彫刻のひろがり—神馬・動物・女神像	108
(一) 神社と銅像—奉納された動物像	
(二) 噴水と銅像	
(三) 公共空間における女性像の登場	
第四節 学校に立つ銅像—君が代少年像(1936年)から二宮金次郎像へ	117
(一) 《君が代少年像》(1936年)の設置過程—国語普及と台湾人少年	
(二) 《二宮金次郎像》の普及—部落振興と皇国少年の模範	
(三) 楠木正成像—「報国忠臣」の銅像	
第五節 銅像たちの「応召」—戦時期の金属回収と銅像	131
(一) 日本内地および台湾における金属回収令と銅像供出の経緯	
(二) 国民学校と二宮金次郎像・楠木正成像の供出	
(三) 全島での銅像供出—1944年8月～10月頃	
(四) 最後の銅像たち—1940年代の銅像製作	
小結	140

第四章 日本統治期台湾における銅像受容論	143
はじめに	143
第一節 凶像と随筆にみる台湾の銅像	
(一) 『台湾日日新報』の風刺画にみる銅像	
(二) 旅行記と銅像—外来者の眼に映った台湾の銅像	
(三) 画家の眼から見た銅像	
(四) 都市の日常風景と銅像—写真に写る銅像	
第二節 銅像の是非—日本統治期台湾における銅像批判	155
(一) 歴代長官の記念事業と銅像—大正期における銅像建設への批判	
(二) 銅像の美的価値	
第三節 「名無しの銅像」—銅像の継承問題	160
(一) 忘れ去られる銅像の主	
(二) 風化する銅像—銅像の管理問題	
(三) 残して欲しい銅像—金属回収と市民の声	
第四節 祖先の記念—台湾人富裕層における銅像制作の流行	167
(一) 台湾人富裕層における銅像制作	
(二) 「本島人」の銅像と公共空間—高雄の陳中和像をめぐって	
小結	174
第Ⅱ部 〈彫刻家〉の誕生とその活動	177
第五章 〈彫刻家〉の誕生—台湾最初の近代彫刻家・黄土水（1895–1930）	178
はじめに	178
第一節 台北から東京美術学校へ—ある台湾人青年の出発	
(一) 幼少期から国語学校時代まで	
(二) 台北から東京へ—東京美術学校への入学	
第二節 東京美術学校での学習と帝展入選	
—黄土水作品における彫刻の〈近代性〉(一) 写生と素材	186
(一) 東京美術学校彫刻科の課程と高村光雲の影響	
(二) 西洋彫刻との接触—オッテリオ・ペシーの大理石彫刻	
(三) 木彫から塑造へ—黄土水の帝展入選と大正期の日本彫刻界の変化	
第三節 大正期日本の彫刻界のなかで	
—黄土水作品における彫刻の〈近代性〉(二) 個性とモチーフ	202
(一) 「個性」の発見—台湾に生まれて	
(二) 裸体像の模索—黄土水の帝展入選作の分析から	

(三) 「近代化」への葛藤—大正期の台湾と台湾文化の確立	
第四節 「本島唯一の彫刻家」—植民地社会での栄光と限界	223
(一) 植民地出身者として—黄土水と皇室との関わり	
(二) 委託制作と台湾の公共空間における黄土水作品	
(三) 黄土水の死と台湾近代美術への影響	
小結	232
第六章 日本統治期台湾における日台の彫刻家とその活動	236
はじめに	236
第一節 植民地台湾と日本人彫刻家—日本から台湾へ／台湾から日本へ	
(一) 総督府新庁舎の建設と鑄造・塑造技術の移入—1910年代	
(二) 台湾から日本へ—鮫島台器(1898-?)の活動	
(三) 来台日本人彫刻家と銅像制作—1930年代	
第二節 黄土水以後の台湾人彫刻家と日本留学—1930年代～1940年代を中心に	269
第三節 日本統治期台湾の美術展覧会と彫刻作品の展示	296
(一) 台湾における日本人彫刻家の個展	
(二) 台湾島内での民間美術団体展と彫刻家	
小結	308
終章	314
(一) 結論	
(二) その後の銅像のゆくえと今後の課題	
参考文献表	327
図版出典一覧	362
図版	376
銅像図版	銅像図版1～20
附表 1 日本統治期台湾の美術展覧会における彫刻作品出品一覧	附表 1-1～1-7
附表 2 植民地期台湾の公共空間における銅像一覧	附表 2-1～2-2
附表 3 黄土水作品リスト	附表 3-1～3-3

凡例

1. 日本語資料における旧漢字・旧かな遣いは、原則として常用漢字・現代かな遣いに改めた。また、踊り字（繰り返し記号）は、慣用的な使い方のもを除いて、正字・かなに直した。引用文中の〔 〕内の文字、※記号、下線等は筆者によるものである。
2. 本文中に登場する台湾／中国人名、地名等は、原則として日本語の常用漢字で表記した。しかし、文献情報については原則として原本通りの表記とした。すなわち、1945年以前の中国語での出版物、および1945年以降の台湾での出版物における著者名・刊行物タイトル・発行元等は中国語繁体字で表記している。

博士論文全文（もしくは一部）の出版を予定、および作品図版等におけるインターネット公表について著作権者からの許諾が得られていないため、以下の部分を除外して公表する。

除外箇所：

第1章～第6章（15～313頁）、図版出典一覧及び図版（362～441頁）、銅像図版（銅像図版1～20頁）、附表1～3

序章

(一) 本論の目的—日本統治期台湾における近代美術／彫刻

本論文は、1895年から1945年まで日本統治下にあった台湾の五十年間を対象とし、植民地社会のなかで近代美術がどのようなモノや制度として成立し、近代美術家と呼ばれる人々がどのような過程で誕生したのかを、彫刻分野から考察するものである。

台湾は、中国大陸の福建省から沖合い150km、日本の沖縄の南西部に浮かぶ台湾本島を中心とした地域である。人口は2350万人あまり、面積は日本の九州よりやや小さい。政治体制としては限りなく独立国でありながらも、正式に国交を結んでいる国は世界十数カ国に限られ、日本との交流も「非政府間の実務関係」という名前で表現されている。台湾が現在の国際社会のなかでこのような位置にあることの歴史上の起点のひとつは、1895年に台湾が清国から日本へ割譲されたことにあるだろう。

台湾は1684年に清国の領内となって以降、約二百年間福建省の一部であった(1885年に台湾省に昇格)。1895年から1945年の日本統治期が日本の敗戦によって終了すると、台湾は国民党政府の率いる中華民国に返還される。この時点では、台湾は「中国」へと復帰したはずであった。しかし、1949年に国民党が大陸での国共内戦に敗れ、蒋介石が全面的に台湾に撤退すると、以降は台湾島および金門・馬祖島のみを実効支配する中華民国の拠点となった。この中華民国としての台湾、という政治体制は現在まで継続しているが、その国際的地位と内実は時代によって変化している。とくに、1970年代初期の米中接近と中華民国の国際連合脱退によって、中華民国が正統的中国国家を代表するという虚構が外的に崩れ、蔣経国晩年の政策以後始まった内政の変革は、内部における台湾化を加速していった¹。さらに、1987年に戒厳令が解除されて以降、台湾の政治と社会の変容は台湾における近代史研究を促進し、日本統治期に関するトピックとその評価をめぐる言説に変化を与えた。それから三十年あまりが経った現在、各都市ではかつて日本統治期に建設された西洋式建築物や和式建築が次々と修復され、公的スペースとして公開される例が数多く出現している。かつての植民地宗主国である日本との親密な関係性を維持しながら、一方では中国大陸との経済的、人的交流はすでに切り離すことができないほど深化しつつ、政治的側面では両者を満足させる解決策はいまだ見つかっていない。

このような歴史状況をふまえたうえで、本論文が「台湾美術」およびその歴史としての「台湾美術史」と呼ぶものが、どのような範囲にあり、また何を対象としているのかを、本論に入る前に確認しておきたい。日本美術史研究者の佐藤道信氏は、「日本美術」という語の概念として、その地理的範囲は明治初年段階の「日本」の領域によっており、第二次世界大戦後の領域もこれとほぼ等しいため、現在の「日本美術」の範囲も同様になっていると指摘している。つまり、ここには明治中期以降に拡大した日本の海外地域の美術は含まれていない。さらに、たとえば「フランス絵画」や「アメリカ絵画」は、西洋美術のなかの別の国の絵画を比べる際に用いることが多いのに対し、「日本画」という言葉は、

¹ この「中華民国台湾化」の過程については、若林正文『台湾の政治—中華民国台湾化の戦後史』(東京大学出版会、2008年)を参照した。

東洋圏の他国を意識しているのではなく、あくまで「西洋絵画」に対置されており、「日本美術」には「西洋美術」や「東洋美術」といった相対概念が想定されているとする²。

このような指摘をふまえると、本論文で取りあげる「台湾美術史」の地理的範囲とは、日本が戦前に統治した台湾本島を中心とする地域であり、これは結果的に1949年以降の中華民国の支配領域とほぼ一致する。だが、注意しなければならないことは、たとえば近代日本において、ヨーロッパ出身の画家や彫刻家が日本を訪問して残した作品は、それらの日本人美術家への影響関係の関わりから、「日本美術史」の範囲で語られることはあっても、「日本美術」とはみなされていない。これと同じく、日本統治期の台湾には、多くの日本人が流入し、長期的に居住して美術作品を制作した。こうした美術家のうち、一部の有名な作家は、現在の台湾における美術史のなかではしばしば取り上げられており、また、日本美術史のなかで語られることもある。しかし、先に佐藤氏が指摘するように、これらの人物およびその作品は、現在の「日本美術」の地理的範囲に入っていないため、多くが日本美術史の範疇からはそぎ落とされている側面があるだろう。

だが、こうした日本人作家の作品を含んで、日本統治期台湾の美術を「台湾美術」とすることは、疑問も残る。戦前の『台湾日日新報』においては、「台湾美術」や「台湾の芸術」という言葉はわりに頻繁に登場しているが、その多くが日本人主導の社会体制を前提としていた。そのため、現在において、在台日本人美術家を含んだかたちで「台湾美術」を、とくに日本人研究者の側から規定することは、植民地主義の繰り返しや、帝国日本とその影響関係のみを重視した東アジア近代美術の叙述に陥らないよう注意が必要となるだろう。

佐藤道信氏が指摘するように「日本美術」という概念は「国民国家」の成立を背景にしており、そうしたナショナリスティックな国家思想とも繋がっている。そのため、「台湾美術」を台湾本島を中心とする人々のみのものとするのも、何らかに排除されてしまうものを生むかも知れない。だが、後述するように、「台湾美術史」が日本統治期終了後の様々な歴史的状況のなかから確立されて来た経緯を考慮すると、一方では「台湾人」という主体性を残して置きたいとも考える。そのため、本論文の対象は、台湾人による美術という側面と、「○○人」という区分でなく、台湾という地域のなかにかつて存在した作品・芸術家・美術活動という二側面をふくんでいる。それにより、日本美術の台湾美術への影響関係という一方的な視点でなく、この地域やそこに生まれた人々の視点から見た美術史という観点をも保持したいと考える。

(二) 先行研究の検討と本研究の課題

① 台湾における研究状況—「台湾美術史」の成立過程

1945年8月は、台湾人美術家らにとって、自身をとりまく社会の大きな転換点になった。日本統治期に始まった全島的な美術展覧会、台湾美術展覧会（台展、1927～1936年）および総督府展覧会（府展、1938～1943年）は毎年10月に開催されていたが、前年の1944年は日本の戦況の悪化のために中止となっていた。1945年10月に台湾が正式に中華民国に接収されると、台湾人美術家らは早い時期から美術展覧会の開催を当局に打診に行った

² 佐藤道信『〈日本美術〉誕生』（講談社、1996年）、19-20頁および103頁。

3。このような流れを受けて、光復後早くも一年後の1946年10月には、初めての台湾全省美術展覧会（省展）が台北の中山堂で開催された。この省展は、「国画部」・「西画部」・「彫塑部」の三部に分けて公募され、審査員を務めたのは、当時三十代から四十代にかけての台湾出身の中堅美術家たちであった。彼らの多くは、日本統治期に日本留学をした経験を持ち、日本の帝展や在野団体展などの各種展覧会、または台湾での台展・府展にも入選して来た実力者である。

しかし、その数か月後に、台湾社会はもうひとつの大きな衝撃を受けることになる。それが、1947年2月に発生した二二八事件であった。この事件は、台湾人美術家らの人生にもぬぐいさることの出来ない傷跡を残した。その最も象徴的な事件は、洋画家の陳澄波（1895-1947）が、故郷の嘉義において政府当局に拘束され、裁判もなしに3月25日に嘉義駅前広場にて銃殺処刑されたことであった。東京美術学校に留学し、日本の帝展および台湾の台展に入選、中国大陸での滞在経験もある陳は、実力・名声ともに当時の台湾人美術家における中心人物であった。また、日本統治期の代表的文学者の一人である王白淵（1902-1965）も、美術界にとって重要な文筆家であったが、二二八事件に関連して捕縛され、釈放後も監視下におかれるなど、その後の活動は精彩を欠いていくことになる。

日本の植民地統治、戦時期、白色テロという暗い時代を経ながら、日本統治期における美術活動の回顧は、光復後早い時期にすでに始まっていた。1947年には、王白淵によって「台湾美術運動史」が雑誌『台湾文物』に発表され、これは後に『台湾省通誌第六卷 学芸誌芸術編』（1958年）に収録された。また、1954年12月15日、季刊雑誌『台北文物』の特集記事のため、日本統治期から活動していた美術家を集めての座談会が台北市文献委員会において催された。その席上で、画家の林玉山（1907-2004）は、「台湾の国画は本来祖国の延長であった。ただ、地元的环境と西洋文化が混ざり合っ変化が起こり、日本人は早くに台湾の絵のなかに台湾の特色や熱帯の情緒を見出した。当時の日本人は台湾芸術絵画を『湾製絵画』と言っていた。光復後、内地の画家はすぐさま台湾芸術は日本絵画だと言う⁴」と発言している。林玉山がこのような発言をした背景には、彼らの描く近代日本画の画材や技法が中国伝統絵画とはかなり乖離しており、大陸から来た美術家と日本統治期を経た台湾人美術家との間で齟齬が生じていたためである（いわゆる、「国画／日本画論争」）。ここでは、日本統治期同様、「台湾美術」の定義をめぐる議論がまた異なった文脈で繰り返されていたのである。日本人にとって台湾らしさを備えた絵画に見えていたものが、中国大陸からみるとあまりにも日本化した作品に見えていた。こうした摩擦は、光復後に発生した新たな問題であった。

一方、こうした日本統治期の美術家の活動をまとめようとする動きは、1970年代後半から再度少しずつ現れ始めた。その萌芽となったのが、1970年代半ばから美術家の謝里法（1938-）が「日抛時期台湾美術運動史」を美術雑誌『芸術家』に発表し始めたことで、これは1979年に書籍として出版された。ただし、こうした文章は美術家自らの回顧やインタビュー、また、同年代の美術家らと友人・知人として交流した経験に基づいたもので、

³ 光復直後の美術活動については、夏亞拿「暗潮洶湧的藝壇：戰後初期台灣美術的動盪與重整（1945-1954）」（台灣大學藝術史研究所碩士論文、2012年）を参照した。

⁴ 「美術運動座談会」『台北文物』第3巻第4号、1955年3月。

歴史研究という形式には則っていなかった。それに対し、美術史研究としての台湾美術研究が本格的に始まったのは、1980年代後半からである。とくに、顔娟英氏は、「日抛時期台湾美術発展史」の調査プロジェクト（1987-1989年）に関わり、以後植民地期美術に関する多くの論考を発表した。とくに、顔氏が中心となって著わした『台湾美術大事年表』（1998年）および、『風景心境—台湾近代美術文献導読』（2001年）は、現在でも当該研究のための最も重要な基礎資料となっている。その後、現在までに、台湾では台湾美術に関する修士論文や博士論文が多数出されており、また『台湾美術全集』（芸術家出版）や雄師美術社の美術家伝記シリーズ等に美術史研究者が関わることで、その作品や資料の整理が進んだ。

このように、日本統治時代における台湾美術史に関する言説は、光復後の白色テロの恐怖が強く残る1940年代後半から1950年代にかけての王白淵の論考に始まり、1970年代の中華民国の対外危機と「台湾化」への舵取り、1980年代後半からの戒厳令解除と民主化の進展による、いわゆる「台湾ナショナリズム」の台頭という時代背景と密接に関わって来た。1990年代以降、「台湾」を前面にして語ることが許されるようになると、台湾を作品のモチーフに採用した日本統治期の台湾人美術家らは、「台湾美術史」の先駆者として位置づけられるようになった。

林玉山が嘆いたように、当初日本統治期の「台湾」の地理的範囲と中華民国の地理的範囲は合致しておらず、光復後には、別の近代史を歩んだ「中国（中華民国）美術」と「台湾美術」の不一致が必然的に表面化することになる。だが、歴史の進展によって、次第に「中華民国」の地理的範囲が「台湾」に合致し、国際的にも内部からも、「台湾」という存在の認識が定着することにより、日本統治期の台湾と現在の台湾を範囲とした美術が、矛盾なく「台湾美術」とその歴史として、描けるようになったといえる。そのなかで、当時の美術家らが帝国日本で近代美術を学び、日本の美術展覧会に多数入選したことは、台湾においてはどちらかというと肯定的に評価されて来た。だが、「地方色（ローカル・カラー）問題」に現れるように、彼らの作品に現れる「台湾」は、台湾人芸術家たちの自らのアイデンティティー表象なのか、植民地統治下でいわば押し付けられた独自性なのかという議論は、2000年代を経て2010年代に入った現在も、継続して存在していると思われる。

② 統治者側からのまなざし—日本における植民地美術の研究

一方、旧統治者側である日本で、こうした植民地統治下での美術活動に目を向ける研究は、1990年代まではごく単発的な動きに過ぎなかった⁵。だが、2000年代になり、オリエンタリズムやジェンダー論の視点が、この時期の美術作品の分析に導入されると、主として日本人画家の見た「アジア」像の表れとして、同時代の日本人作家の作品が議論の俎上

⁵ 日本で植民地期美術に着目した最も早い時期の業績として、中村義一「台展、鮮展と帝展」『京都教育大学紀要 A』75号（1989年9月）、同「石川欽一郎と塩月桃甫」『京都教育大学紀要 A』76号（1990年3月）や、立花義彰「石川欽一郎 人と作品」（上）、（中）『静岡県立美術館紀要』7号（1989年）、および12号（1994年）などがある。

にのせられるようになった⁶。また、朝鮮や台湾だけでなく、満洲、東南アジアといった地域の美術研究も近年登場して来ている。こうした 2000 年代以降の研究蓄積は、2009 年の「近代の東アジアイメージ」展（豊田市美術館）、2014 年の「官展にみる近代美術」展（福岡アジア美術館ほか）、「描かれたチャイナドレス」展（ブリジストン美術館）、2015 年の「『朝鮮』を描く」展（神奈川近代美術館ほか）の開催に繋がっており、また『日本近現代美術史事典』（2007 年）⁷、『美術の日本近現代史』（2014 年）⁸にも、台湾・韓国・満洲における植民地期美術史の項目が設定されるなど、この十五年余りで、日本近代美術史のなかにこの分野が研究領域として確立されつつあるといえる。

こうした、日本側・旧植民地側の双方からの植民地期美術史研究のなかで、最も議論の対象となってきたのが、「地方色（ローカル・カラー）」の問題である。それは、朝鮮では 1922 年に始まった朝鮮美術展覧会（朝鮮美展）、台湾では 1927 年からの台展、府展において、朝鮮や台湾独特の気候や風土、生活を反映した「地方色」のある作品が、内地から来た日本人美術家による審査の大きな基準になったものである。金恵信氏は、朝鮮美展は「文化政治」の徹底を促すもので、「文化政治」を支える考えのひとつが、植民地の人々への偏見と差別の眼差しをふくんだ「同化政策」だったとする⁹。そして、民族衣装の女性に代表される植民地イメージ、逆に明るい色彩を使ったプリミティブな郷土イメージを、朝鮮美展入選作品から指摘している。台湾や韓国では、おおむねそうした観点から、官展審査員の言説分析、また「台湾／朝鮮らしさとは」という問いに答えた結果としての、植民地の美術家達の作品について造形分析がなされてきた¹⁰。しかし一方、こうした研究は、その前提としての、なぜ「美術」においては、その地域の（ときには民族の）「固有性」や「特色」を明確に示すことが称揚されるのか、それらの言説が、日本が同時期に推進していたとされる「同化政策」と矛盾してはいないのか、という点には、これまでうまく回答出来ていなかったきらいがあった。

⁶ 山梨絵美子「日本近代洋画におけるオリエンタリズム」東京国立文化財研究所編『語る現在、語られる過去：日本の美術史学 100 年』（平凡社、1999 年）、児島薫「中国服の女性像にみる近代日本のアイデンティティ形成」『実践女子大学文学部紀要』44 集（2002 年 3 月）、池田忍「『支那服の女』という誘惑—帝国主義とモダニズム」『歴史学研究』765 号（2002 年 8 月）、西原大輔「近代日本絵画のアジア表象」国際日本文化研究センター紀要『日本研究』26 集（2002 年 12 月）など。

⁷ 尾崎信一郎ほか編『日本近現代美術史事典』（東京書籍、2007 年）。

⁸ 北澤憲昭、佐藤道信、森仁史編『美術の日本近現代史：制度・言説・造型』（東京美術、2014 年）。

⁹ 金恵信『韓国近代美術研究』（ブリュッケ、2005 年）、77-78 頁。

¹⁰ 台湾における「地方色」問題の先行研究としては、廖瑾瑗「台湾近代画壇の「ローカルカラー」—「台湾美術展覧会」東洋画部を中心に—」『シリーズ・近代日本の知第 4 巻 芸術／葛藤の現場—近代日本芸術思想のコンテクスト—』（晃洋書房、2002 年）、顔娟英「日治時期地方色彩與臺灣意識問題—林玉山從「水牛」到「家園」系列作品」『新史学』15-2（2004 年 6 月）、林惺嶽「「南國風光」的背後：帝國眼光開啟下的台灣美術之剖析」『日治時期台灣美術的「地域色彩」展論文集』（國立台灣美術館、2007 年）などがある。

この疑問に対し、邱函妮氏は近年の博士論文のなかで、ドイツで十九世紀終わりから二十世紀初期にかけて展開され、早くから日本にも紹介された「郷土芸術 (Heimat Kunst)」運動に着目し、この「郷土芸術」の思想が、1927 年から始まった台展における郷土芸術の創造と「地方色」表現への要求に繋がっていることを指摘した¹¹。また、それ以前に、西原大輔氏は、1910 年の高村光太郎による「緑色の太陽」の文を例に、日本内地で地方色が語られるとき、その「地方」とはすなわち日本であり、そこでは欧米と異なる日本らしさを意味していたと指摘している¹²。つまり、「地方色」の指す「地方」とは、最初から海外植民地の官展における、「内地・中心=日本」と「外地=地方」を示す言説としてあったのではない。それは、植民地での官展が始まる以前の三十年から四十年のあいだにおける、日本近代美術の自己経験から導きだされたひとつの指針であり、美術表現において自国のエスニックなものを取り上げて自己主張するという、近代美術の方法であったといえる。

こうした指摘は、これまでの研究の多くが、「帝国」対「地方 (植民地)」の文脈においてのみ分析してきた植民地期美術の問題が、実際にはそれ以前からの、日本が受容した「近代美術」における固有の文法に起因していることを明らかにした点で注目すべきである。だが、一方で注意すべきなのは、このことは、例えば、当時の日本人美術家らの作品や言動を、「画家本人にはそのような気持ちは無かった」「作品そのものの良さをもっと評価すべきだ」といった方向へ肯定するものではない点である。千葉慶氏はこのことについて、作家が自覚的に知／権力システムに寄り添って制作することは実際には稀であり、作品の多くはあからさまなイデオロギーを表現するものではない。しかし、必要なことは、この通常では認識できない、しかし我々に影響を与えている知／権力システムをいかに捕捉し、そこから我々の主体をずらしていく方法を探ることにあるとする¹³。

また、こうした美術表現における地域の風土・風俗の独自性の称揚は、他方では、被植民地者側から発せられた作品の内容や言説と、表面上では一致する部分があり、そのことがこの問題の語り方を一層困難にしている。例えば、台湾において、日本統治期における美術家らは、表立って抗日運動や民族運動に関わった人物はほとんどいない。そして、またその作品におけるモチーフも、台湾風景など、多くが日本人美術家らのそれと共通した、「穏健な」内容である。日本統治期の歴史が、今日において極端にはマイナスのものとは捉えられていない台湾において、日本統治期に活動した第一世代の台湾人美術家らは批判を受けている訳ではない。だが、こうした表現が、台湾の独自性の表現なのか、はたまた統治者側の眼差しを内面化したものではないのかという疑問がどこかに存在することも確かであろう。しかし、こうした疑問が常に解消されないことこそが、被植民地という歴

¹¹ 邱函妮「「故郷」の表象：日本統治期における台湾美術の研究」(東京大学大学院人文社会系研究科博士学位論文、2016 年)、78-79 頁。

¹² 西原大輔「日本の帝国美術ネットワークと地方色論」『日治時期台湾美術的「地域色彩」展論文集』(国立台湾美術館、2007 年)、47 頁。

¹³ 千葉慶「現在、日本近代美術がどうアジアを描いてきたかを問うということ」『豊田市美術館紀要』3号 (2010 年)、9 頁。

史を持つ側が、今日でもまだその点において、葛藤を背負わされていることを示している。だが、そこでは、今日のような対等な立場での日台交流が行われていた訳でなく、統治者側が公的な発言権を握り、文化や教育、言語面で圧倒的に優位な立場に立っている状況下で、近代美術家という存在の前例を持たない台湾人青年美術家らの、様々な試行錯誤があったはずである。

このことを、とくにここで言及したのは、東アジアにおける植民地期の美術史研究のなかでは、現在においても、日本人美術史研究者は日本人美術家の活動を研究し、植民地出身の美術家については現地研究者が担当するという住み分けが、傾向として続いているからである。日本側の研究者においては、この植民地美術の問題が、日本近代美術史上の問題と、また地続きのレベルで捉えられる現象である、との気づきと共感が必要のように思われる。「日本近代美術史」のなかでは、「西洋美術」と格闘し、そこから日本の独自性を見出そうとする、日本の美術家らを共感を持って語りながら、反転して「東アジア近代美術史」においては、被植民地者の近代美術における葛藤やその限界を、あたかも他者の歴史として傍観する姿勢が、わずかにでも含まれていないだろうか。

本論文は、筆者が日本人であり、日本語で書くという立場は変わらないものの、研究内容は、主にこれまで台湾で進展して来た台湾美術史に接続するものとなっている。またその一方で、以上に述べたような近代日本美術史の問題点をふまえ、同時代の日本彫刻史を別側面から映し出すという側面も持っている。では、こうした日台の近代美術史研究において、本論文があつかう「近代彫刻」とは、さらにどのように位置づけられるのか、続けて日台の近代彫刻研究の概括および本論文の課題をまとめる。

③日台における近代彫刻研究

近年、これまで研究が盛んな分野とは言えなかった近代日本彫刻史において、少しずつ新たな論考が積み重なっている。このような流れは、1990年代からの田中修二氏の『近代日本最初の彫刻家』（吉川弘文館、1994年）や『彫刻家・新海竹太郎論』（東北出版企画、2002年）といった、明治初期・中期の近代彫刻家に関する堅実な研究から始まっているだろう¹⁴。田中氏は、それまで明治時代末からのオーギュスト・ロダンの受容から語られがちであった近代日本彫刻において、いささか時代遅れと見なされていたその前の世代の彫刻家らに光をあてた。そのことで、「彫刻」が美術ジャンルとしてまさに成立しようとする時期の彫刻家とその作品の多様性を見事に描き出したといえる。また、それは必然的にそれらの作家が手がけた多くの近代日本の銅像についての視座をふくんでいた。こうした銅像研究の流れは、1990年代後半からの「屋外彫刻調査保存研究会」の活動を経て、戦前の銅像写真集である『偉人の俤』（ゆまに書房、2009年）の復刻にも繋がっている。また田中氏を中心として近年、近代日本彫刻史を総括する大作、『近代日本彫刻集成』

¹⁴ ただし、それ以前に発表された中村傳三郎『明治の彫塑：「像ヲ作ル術」以後』（文彩社、1991年）も、明治初期からの近代彫刻に焦点をあて、新海竹太郎や銅像についても取り上げた重要な労作である。

(2010年～2013年)¹⁵が上梓され、さらにその概論部分をまとめた田中修二『近代日本彫刻史』(2018年)¹⁶が出版された。また、小田原のどか氏は、自身で彫刻に関する実作と論評を並行して行い、研究者と彫刻家の両者から寄稿・インタビューを集めた彫刻に関する書籍を発行するなど、近年意欲的な発表を行っている¹⁷。

田中修二氏の研究が、美術史研究の立場から真正面に近代日本彫刻に向き合ったものだとすれば、木下直之氏は、それまでの「美術」概念からはみ出すものに焦点を当て、近代日本彫刻史に新たな面白みを与えた。それは例えば、張りぼての鎌倉大仏であったり、生き人形といった、それまで「近代彫刻」の範囲では語られなかった種々の造形物である¹⁸。このような、いわば斜めからの視点による近代日本美術研究のなかで、木下氏は銅像や記念碑に関する論考をも多く発表してきた¹⁹。こうした、近代日本が生み出した銅像への着目は、平瀬礼太氏の『銅像受難の近代』(2011年)²⁰にも共通するものだろう。

銅像をふくむ近代日本のモニュメント研究は、これら美術史研究からのアプローチ以外にも、歴史学研究からも同時期に始まっていた。1980年代から始まったフランスのピエール・ノラ (Pierre Nora) 「記憶の場」の研究プロジェクトは、2000年代になって日本に翻訳されたが²¹、その前後から、共同体の「記憶」と、それを維持し再生産する装置としての記念碑に関する論考が、日本の歴史研究者のなかでも増加し始めていた。近代日本に関する研究に限ると、例えば国立歴史民俗博物館による慰霊碑・戦争記念碑調査²²や、日清戦争時の戦争記念碑に関して綿密な論考を著した檜山幸夫の研究²³などがある。美術史学が、もっぱら制作者である彫刻家の造形や創作活動から、モニュメント研究に接近するのに対し、歴史学は碑の建設経緯や受容、碑に刻まれた内容を史料の一部として、時代背景を描いていくという方向性の違いがある。また、記念碑は必ずしも彫刻家が制作に関わるとは限らず、美術史学と歴史学では、対象とする「モノ」に若干のずれはあるだろう。だが、多分野からのこうした参与は、日本のモニュメント研究の裾野を広げるものであるといえる。

¹⁵ 田中修二編『近代日本彫刻集成』第1巻～第3巻(国書刊行会、2010年～2013年)。この他、近代日本彫刻史を描く試みとしては、東京国立近代美術館ほか『日本彫刻の近代』(淡交社、2007年)も参考となる。

¹⁶ 田中修二『近代日本彫刻史』(国書刊行会、2018年)。

¹⁷ 小田原のどか編著『彫刻 SCULPTURE 1—空白の時代、戦時の彫刻／この国の彫刻のはじまりへ』(トポフィル、2018年)。

¹⁸ 木下直之『美術という見世物：油絵茶屋の時代』(ちくま学芸文庫、1999年)。

¹⁹ 木下直之『世の途中から隠されていること：近代日本の記憶』(晶文社、2002年)。同『銅像時代：もうひとつの日本彫刻史』(岩波書店、2014年)など。

²⁰ 平瀬礼太『銅像受難の近代』(吉川弘文館、2011年)。

²¹ ピエール・ノラ編・谷川稔監訳『記憶の場』全3巻(岩波書店、2002年～2003年)。

²² 国立歴史民俗博物館編『近現代の戦争に関する記念碑：「非文献資料の基礎的研究」報告書』、2003年。

²³ 檜山幸夫「日清戦争と民衆」『近代日本の形成と日清戦争—戦争の社会史』(雄山出版、2001年)。

一方、台湾においても、日本統治期の彫刻に関する研究が近年発表されている。たとえば、朱家瑩「台湾日治時期的西式雕塑」（台湾大学芸術史研究所修士論文、2009年）は、美術史の立場から、日本統治期に本格的に始まった西洋彫刻の受容と日台の彫刻家の活動について分析した。また、李品寬「日治時期台湾近代紀念雕塑人像之研究」（台湾師範大学台湾史研究所修士論文、2009年）は、同時代の史料を基に日本統治期に設置された銅像の基本データをほぼ完備している²⁴。こうした研究は、絵画に比べて圧倒的に少ない、日本統治期の台湾美術史における彫刻史研究に貢献をなした。

④本研究の課題

以上の先行研究をふまえ、本論文で解決すべき課題を述べる。まず、前提として、戦前期の日本および東アジアの近代彫刻史研究における課題には、現存作品および作家の個人資料の少なさが挙げられる。原因としては、彫刻は絵画に比べてマイナーな地位にあり、かなり著名な作家でも無ければ、作品の売買や保管が難しく、適切な保存がなされにくい傾向にあること。さらに、銅像や記念碑といったモニュメントは、戦時期の金属回収、その後の政治体制の転換や人々の移動によって、かなりの量が失われた歴史的経緯がある。実際に、日本統治期台湾の銅像や当時の日台の彫刻家による作品は、現存しているものの方が圧倒的に少ない。さらに、その貴重な現存作も、美術館における所蔵作品（いわゆるパブリック・コレクション）が非常に少なく、その多くが遺族や個人コレクターの所蔵による。そのため、作品の実見がより困難となる。

美術史研究では、実物を見た上での作品分析がひとつの重要な柱となる。しかし、本研究ではこうした状況を踏まえ、実物作品の実見や発掘を重視しながらも、当時の作品図版や雑誌・新聞等の文字資料、遺族等の保管する一次資料など、広範囲な資料の発掘・整理を通して、歴史学的手法も合わせた総合的な調査を行った。それにより、既存研究には無かった、新たな作品や図像、資料を発見し、現存作品の不足を補う手段とした。

また、これまでの近代日本彫刻史研究における不足点として、近代日本彫刻家が多く関与したものであるにもかかわらず、当時の海外植民地に設置された多くのモニュメント、とくに銅像については、いまだほとんど研究の手が付けられていない点にある。また、現

²⁴ 個々の彫刻家に関する先行研究については、各章や参考文献表においてまとめた。この他、日本統治期台湾の銅像に言及した先行研究としては、以下のものが挙げられる。まず、戦後最も早い時期の文献と思われるのが、蘇省行「北市日人的碑和像」『台北文物』第八卷第三期（1959年10月15日）で、日本統治期の台北市内に建設されていた主だった記念碑や銅像の形状、設置時期、地点等の情報が列挙されている。また、それより以前の、一剛「外人的銅像」『台北文物』第六卷第四期（1958年6月20日）では、フォーリー像とバルトン像といった西洋人の銅像について言及されていた。学術論文においては、邱函妮「街道上的寫生者—日期時期的臺北圖像與城市空間」（台湾大学芸術史研究所修士論文、2000年）では、台北新公園にあった後藤新平像に関して、画家・立石鉄臣の文章や挿絵作品などが分析されている。この他、陳柔緒『台湾西方文明初體驗』（麥田出版、2005年）、蘇碩斌『看不見與看得見的臺北』（修訂一版、群學、2010年）なども、日本統治期の銅像について取り上げている。

在旧植民地側で進行している研究成果は、言語の問題もあって、日本側に伝わりづらい状況にある。そのため、本研究では、日本側および台湾側の両者の先行研究および資料を活用し、台湾近代美術史と日本近代美術史を連結することを目標とする。また、先に挙げた台湾側の研究も、すでに一定の成果が挙げられている。しかし、研究者の層が薄いため、個別事象のさらなる精密な実証研究、日本側資料の十分な活用、または全体を包括する理論的な枠組みの提示といった、一次資料の整理以後に必要な作業の進展がなかなか見られていない。

先述したように、今日の研究においては「彫刻」の定義が拡大し、美術作品としてだけでなく、政治・社会の様々な局面で現れる立体造形が、その議論の対象となり始めている。それに加えて、日本統治期台湾のたとえば銅像の多くは、日本の彫刻家が制作し、内地から台湾へと送られて来た。台湾を訪れたことのない日本人彫刻家の作品が、台湾に住む日本人・台湾人を中心とする注文者の意図を汲んで完成し、植民地下の台湾の公共空間に設置されていったのである。さらに、そうした造形イメージのおおもとは、日本と台湾といった要素のみならず、実態と虚像をおりまぜた「西洋近代」というものの存在を抜きにして語ることは出来ない。こうしたいわば「植民地的」ともいえる混沌とした状況をどう分析するかについては、日本と台湾両方向からの研究状況と資料をふまえたさらなる検討が不可欠であり、本研究はそのひとつの試みとしたい。

(三) 用語の整理

次に、本論で使用しているいくつかの用語について整理しておく。

「彫刻」と「彫塑」

近代日本美術史のなかにおける「彫刻」という言葉の登場とその定義については、すでに多くの論考でまとめられている²⁵。それらによると、明治に入って日本政府が最初に正式に万博に参加した1873年のウィーン万博の前年、その出品規定を日本語に翻訳した際には、西洋でいう「sculpture」の訳語は、「像ヲ作ル術」とされていた。その後、1876年に開校した工部美術学校では、「彫刻学科」の語が使用され、そこから「彫刻」という言葉が広がっていったと考えられる。

より子細に見ると、木下直之氏や田中修二氏が指摘するように、この「彫刻」という言葉が使用される以前、ウィーン万博出品規定の翻訳語にも登場する「像」という言葉が、幕末から明治初期にかけては多く使用されていた。1860年にアメリカを訪れた遣米使節団や、1962年にヨーロッパを訪れた遣欧使節団の一員は、街の銅像や博物館に置かれた彫刻物を見て、様々な「像」の存在を書き記している。また、田中修二氏は、1971年に出版された中村正直訳のスマイルズの『西国立志編』には、「彫像」という言葉が使用さ

²⁵ たとえば、木下直之「石像楽園」『美術という見世物：油絵茶屋の時代』（平凡社、1993年／講談社学術文庫、2010年）、佐藤道信『〈日本美術〉誕生』（講談社、1996年）、田中修二「第二章 最初の彫刻家たち 概説」田中修二編『近代日本彫刻集成』第1巻（国書刊行会、2010年）、田中修二「像と彫刻—明治彫刻史序説」『國華』120巻1号（2014年8月）、田中修二「第二章 彫刻のはじまり」『近代日本彫刻史』（国書刊行会、2018年）など。

れており、明治初年には、「スカルプチャー」を表わす語として、「像」や「彫像」といった言葉が一般的になっていたとする。しかし、なぜ工部美術学校では、「彫刻」という新しい語を使用したかは、同校が、必ずしも肖像彫刻だけでなく、建築装飾などに関わる人材の育成を目的としていたからであり、またこの語によって、この表現分野の社会的ステータスが保証されたと指摘している²⁶。

こうして、明治二十年代頃には定着した「彫刻」という言葉だが、一方ではこの時代に新たに登場したこの分野の造形表現全てに対応できるものでもなかった。「彫刻」は、木彫や石彫などの「刻む (Carving)」彫刻作品には適切だが、西洋彫刻のような粘土によって造形を形づくっていく「モデリング (Modeling)」の彫刻を指すには相応しくなかった。東京美術学校彫刻科を卒業した美術史家の大村西崖 (1868-1927) は、1893 年に「彫塑論」という文章を発表し、そこにおいて前者の「彫刻 (Carving)」と後者の「塑造 (Modeling)」の意味を合わせたかたちで、「彫塑」という言葉の使用を提唱した。この「彫塑」または「塑造」という言葉は、東京美術学校彫刻科塑造部などの学科名や、帝展の出品部門においても後に「彫塑」が使われるなど、戦前期には一定の広がりを見せた²⁷。

しかしながら、今日において、日本語の「彫塑」は、専門的またはこうした歴史的な説明の文脈で主に使われており、一般的には素材や技法の区別なく、立体造形芸術を表わす際には、従来の「彫刻」の言葉が主に使用されている。そのため、本論文の題名や本文に使用している「彫刻」は、彫刻と彫塑のいずれをも含んだ「sculpture」の意味として使用している。他方、現在の中国語においては、この状況が日本語と逆転しており、彫刻と彫塑をどちらも含む意味での「sculpture」としては、「雕塑」が主に使用されている。逆に、「雕刻」は、木彫や石彫など「刻む (Carving)」彫刻に限定される用語となる。このため、中国語の「雕塑」の翻訳に際して、文脈上問題ない場合は日本語の訳語として「彫刻」を当てている場合がある。

「銅像」について

「銅像」という言葉は、本来であれば、「銅」という素材によって作られた「像」、英語でいう「bronze sculpture」の意味であるが、本論文では主に「bronze statue」の意味合いとして使用している。すなわち、銅という素材で作られた彫刻という意味だけでなく、近代以降に世俗的な場所や目的のために作られた、「偉人像」を主に指している²⁸。これは、

²⁶ 前掲、田中修二「像と彫刻—明治彫刻史序説」『國華』120 卷 1 号 (2014 年 8 月) を参照。なお、田中氏はこの文章のなかでは、西洋全般における「彫刻」を指すものとして「スカルプチャー」を使用しており、必ずしも英語の「sculpture」のみを指していない (同論文の註 1 を参照)。

²⁷ 田中修二氏は、「「彫塑」という語は、いまでは以前よりあまり使われなくなつたと思われるが、昭和中期頃まではごく一般的な用語であつた」とする。前掲、田中修二「像と彫刻—明治彫刻史序説」『國華』120 卷 1 号 (2014 年 8 月)。

²⁸ 日本における「銅像」の言葉の意味については、前掲、田中修二『近代日本彫刻史』(2018 年)、182-183 頁。大坪潤子「第四章 銅像・記念碑」概説『近代日本彫刻集成』第 1 巻 (2010 年) も参照。

たとえば戦前にも、彫刻家の朝倉文夫（1883-1964）が、

銅像というのは、普通青銅や赤銅などを鋳て造った神仏、人物、動物などのことです。しかし、主に功労のあった人の生きていた時の姿を表わしたものを銅像と呼びならわしているようです²⁹

としているように、近代日本においては、「銅像」は、主として明治以降に作られた偉人像をイメージする言葉であるためだ。そのことは、たとえば仏像などは同じく銅製の像であるものの、これらは「銅像」とは一般に呼ばれていないことからもうかがえる。また、本論文で検討する日本統治期台湾の公共空間に設置された人物像は、銅像が大多数だが、一部大理石像が含まれる。これは、素材の面からみると「銅像」ではないが、機能や目的からしてこうした広義の「銅像」に含まれると考え、とくに素材で区別せずに同列に検討対象としている。

「銅像」に近接する言葉として、「モニュメント」という語があり、これは英語（または仏語）の「Monument」からの外来語であるが、この語は、早くは教部省の1876年の文書において「西洋モニュメント」の語として登場していた³⁰。西洋では、銅像以外にも、記念碑や記念建造物など幅広い記念のための造形物を含む言葉だが、現在の日本語では、どちらかという、銅像や記念碑をまとめて指す言葉として使用されており、本論文でもこれに近い意味で使用している。また、「銅像」とは別に、「公共彫刻」という語も存在する。しかし、日本語においては、これは戦後以降に設置が急増した、公共の場に建てられた、裸婦像、抽象彫刻等のあらゆる種類の彫刻を連想させる言葉である。そのため、本論文が主要な対象とする公共空間における人物像については、「公共彫刻」ではなく、「銅像」を使用した（ただし、人物像以外の像についての検討の際に、便宜的に「公共彫刻」という語でまとめている箇所がある）。

「公共空間」という用語について

また、本論文中では、主に銅像の設置された場所について、「公共空間」という言葉を多用している。齋藤純一氏は、「公共性」という用語について、そこには三つの意味が含まれるとする。それは、国家に関係する「公的な (official)」もの、すべての人びとに関係する「共通のもの (common)」、そして「誰に対しても開かれている (open)」という意味である³¹。本論文において、銅像設置を議論する場面で扱う「公共空間」という言葉は、主に三つ目の、「誰に対しても開かれている (open)」という意味での「公共空間 (public space)」として使用した。

むろん、本論で取り上げる銅像が設置された場所は、大都市における公園、広場、駅前

²⁹ 朝倉文夫「銅像と呼んでいるもの」『少年倶楽部』21巻11号、大日本雄弁会講談社、1934年、163頁。

³⁰ 「官社へ銅石像設立之儀ニ付伺」『公文録』明治十年・第十八巻・明治十年一月・内務省伺（二）（国立公文書館デジタルアーカイブ）

³¹ 齋藤純一『公共性』（岩波書店、2000年）、viii-ix頁。

から、比較的限られた人々が使用する地方の公学校³²まで様々であり、各々の「公共空間」の社会的重要度やアクセスのしやすさには、差異が存在している。しかし、不特定多数の人が望めば無料で（あるいは比較的安価な入場料で）出入り出来る場所としての共通性があるとの考えから、本論文では、これらをまとめて便宜的に「公共空間」とした³³。

「台湾人」、「原住民」

なお、台湾には様々なエスニック・グループが存在し、本論文で使用している「台湾人」の中身も一様ではない。ただし、本論文で取り上げる「台湾人」のほとんどが、実質的には十七世紀以降に対岸の中国大陸から渡って来た漢民族のことを指している。この漢民族も、閩南語（台湾語）を話す福佬人と、客家語を話す客家人に大きくは分けられるが、彼ら漢民族は、日本統治期には「本島人」と呼ばれた人々であり、日本統治期から今日にかけて、台湾における人口全体の八割以上を占めて来た多数派である。一方、漢民族が流入する以前から台湾に住んでいたオーストロネシア語族に属する人々のことは、「原住民」の用語を使用した。これは、日本語における「先住民」の意味である。しかし、中国語では「先住民」の語が、かつて住んでいたが現在は既になくなってしまった人々という意味になること、また、日本統治期には「蕃人」や「高砂族」、国民党政権時代には「山地同胞」などと呼称されていた彼らが、自ら「原住民」と名乗るようになった歴史的経緯があり、現在では日本の学術界でも、「原住民」と呼称することが一般的となっている。そのため、本論文もこれにならった。

（四）本論文の構成

以上に述べてきた問題意識に基づき、本論文の構成と章立てを以下に述べる。本論文は、第一章から第四章までを第Ⅰ部、第五章と第六章を第Ⅱ部としている。まず、第Ⅰ部では、「モノ」としての近代彫刻に着目する。日本統治期の台湾に最も早く登場した西洋式の近代彫刻として「銅像」があり、これが第Ⅰ部の最も主要なテーマとなる。ここでは、これら銅像が、台湾の公共空間にいかに関わり、それがどのような意味を持っていたのか、そして日本統治初期から後期にかけて、その意味がいかに関わり変容していったかを論じる。一方、後半の第Ⅱ部は、「ヒト」としての近代彫刻家を中心に論じる。ここでは、日本統治期台湾に関わりのある台湾人および日本人彫刻家の生涯とその活動の内容、作品についてまとめ、その意義を検討する。

³² 台湾人の日本語教育に関する機関として、領台当初には国語伝習所が設置された。1898年の「台湾公学校令」により、国語伝習所は公学校に置き換えられ、以後台湾人児童の初等教育の場となった。他方、小学校は在台の日本人児童のための学校であった。1922年の教育令改正以降は、日本人・台湾人の区別をしない「共学制」が実施されたが、高い日本語能力を必要とする小学校で学ぶ台湾人生徒はその後も少数に限られていた。1941年の「国民学校令」により、台湾全島の小学校と公学校は全て国民学校と改称された。

³³ そのため、本論文で使用しているこの「公共空間」とは、いわゆるハーバマスのいう市民同士が対話する空間という意味での、「公共性／公共圏（public sphere）」の意味ではない。

まず、第一章では、日本統治初期に集中して行われた大型銅像建設を取り上げ、最初期に植民地社会にモノとして現われた近代彫刻が、新しい植民地社会の状況下でどのように利用され、その建設にどのような社会的背景があったのか明らかにする。ここでは、こうした一連の総督像や民政長官の像の建設が、主に台湾人側の主導によって推進されていたことを指摘する。つづく、第二章においては、逆に日本人側の記念行為としての、近代彫刻や銅像の設置について取り上げる。また、それと同時に、記念碑や壁画、記念館建設といった彫刻以外の記念行為の例を並行して参照しながら、こうした美術作品と記念行為の関係性、そして近代日本の美術家と植民地との関係性について考察する。銅像を建設する行為は、台湾人側にとっては、日本統治への協力姿勢を示すことで自身の社会的地位を有利にする狙いがあったと思われ、一方日本側は、こうした記念行為を通じて日本の台湾統治の視覚化、正統化を狙っていたと思われる。次に、第三章においては、公共空間と銅像をテーマに、こうした銅像建設に関する法令の検討、および各地の都市空間と銅像の位置関係を整理し、そこから銅像がどのようなモノとして想定されていたかを考察する。さらに、人物像としての銅像以外に、神社に奉献された動物の像など、様々な彫刻物が当時の公共空間に登場していたことを取り上げる。また、第三章の後半では、日本統治期後期から初等教育の現場に登場した銅像を取り上げ、その中身と意味の変容を追う。さらに、戦時期の金属回収にいたって、日本統治初期から登場した銅像が、統治期の終了を前にどのように消滅していったかを、資料を基に検証する。こうした銅像建設を行う側の背後にある政治的思惑や社会的背景の検討以外に、最後の第四章では、それらとはやや離れて、一般の人々が、こうした銅像をどのように見ていたのかという受容の問題について、当時の挿絵や漫画、随筆、新聞・雑誌の言論から分析する。

他方、モノが現われると、次にそれを作るヒトが登場することになる。第II部は、彫刻を作る「ヒト」としての彫刻家の活動に着目する。銅像などの近代彫刻が日本統治期に登場したように、「近代彫刻家」と呼ばれる人々もこの時代に登場した。最初の第五章では、台湾出身者として初めて近代彫刻家となった、黄土水（1895-1930）の生涯と作品を例に、彼の学んだ近代彫刻の特徴とその経験を明らかにする。さらに、第六章では、日本人彫刻家として台湾に来た例、また台湾出身の日本人彫刻家が日本で活動した例、そして黄土水の後の世代の台湾人彫刻家らの日本留学といった事例を通じて、植民地社会が成熟するなかで、彫刻作品や彫刻家がどのように日台の間を行き来し、活動していたかを検討する。また、こうした彫刻家たちが関わった台湾内での個展や美術団体展を整理し、日本統治期台湾内における彫刻家の活動と彫刻展示、およびその意義について分析する。最後に、終章で全体のまとめと今後の課題を述べる。

終章

(一) 結論

近代以降世界各地で隆盛を誇った銅像という形式は、現代においてはすでに時代遅れのもののようにも感じられるが、いまだに解決されない今日の問題をはらんでいる。本論文の第Ⅰ部では、日本統治期台湾に設置されたこうした銅像を近代彫刻のひとつとして考察の対象とし、そこに現れた銅像設置という行為の意味、モノの意味、場所の意味という点について検討してきた。そして、論文の第Ⅱ部では、そうした近代彫刻を制作する担い手として、日本統治期における日台の近代彫刻家の活動を整理した。

日本統治期台湾における銅像建設の性質とその変化

まず、銅像は日本統治期に入って初めて台湾に出現したモノであり、最も早期に人々の眼に触れやすい空間に展示された西洋式彫刻であったといえる。しかし、それは、銅像が登場した当初から、それらが「彫刻作品」や「芸術作品」として認識され、社会に普及していったことを意味しない。つまり、日本や台湾で、近代彫刻の一部として登場した銅像は、彫刻ではなく、「銅像」という社会的役割が存在していた。この、銅像を建てるという行為は、当時の台湾社会においてどのような意味を持っていたのだろうか。それは、たとえば、初期の大型銅像建設を主導した辜顕栄にとっては、植民地社会での地位を顕示し安定化するための社会事業活動の一部として意味ある行為だった（第一章）。また、こうして建設の始まった銅像は、多くが公園と予定される場所に建てられていた。逆に、高雄のように像は作られても適切な場所が見つからず、1920年代になって寿山の公園化が決まってからようやく設置された例もある。つまり、銅像はその性質からして当初から公共の場と非常に強い関係性を有していたのである（第三章前半）。

こうした、公共空間と銅像の問題は、日本側と台湾側との間で、微妙な軋轢を生じさせる要因ともなった。台湾人による日本統治初期の銅像建設のみならず、日本側も台湾においてその当初から多くの記念事業を行った。それは、本論で挙げた、《台湾警察官招魂碑》（1908年）や北白川宮の顕彰、児玉・後藤記念館建設（1915年）などである。こうした記念行為には、記念碑や絵画、銅像など様々な美術品の形式が用いられ、その制作には内地の著名な日本人美術家らが当たった。総督府側は、こうした記念行為を積極的に進める一方、台湾人の行う銅像建設行為に必ずしも全面的に賛同していたわけではなく、そこには相手への懐疑も含まれていた。このような感情が現れたもののひとつに、1935年に総督府前に設置された樺山資紀像の例がある。この樺山像の建設趣意書のなかでは、それ以前の1917年に辜顕栄の設置した樺山資紀像は、「私人」によるものとされた。この表現には、日本側を「公的な」基準とし、台湾人の主導する事業があくまで私的行為へと格下げされてしまう構図が見てとれる。台湾人側が初期に建設主導した、後藤新平、児玉源太郎、樺山

資紀像の三体は、すでにあるにもかかわらず、日本側によって同じ像主の別の銅像が再度設置されている。銅像という公共的な場所に建てられるモノとその行為をめぐってさえも、台湾人側と日本人側の間で、主導権の争いが見られたのである（第二章）。ただし、また一方で、日本統治初期における辜顕栄主導の銅像設置という行為は、総督府側におもねっており、また台湾人による日本人高官の銅像というねじれた構造をとりつつも、台湾人を代表するかたちでその財力を誇示し、台湾人側が都市における公共空間の一部を利用できる力を示せたともいえる。

他方、こうした建設者の思惑や理念とは裏腹に、当時の人々は比較的自由的な感情で銅像を見ていた。銅像は、日本統治下の社会で都市空間が改編されていくのと並行し、公園や駅前広場といった場所に出現していった。つまり、銅像は日本統治という新しい社会の変化を視覚的に最もよく感じさせる場所に登場したのである。だが、銅像は日本国内でも出現当初から賛否の分かれる存在であり、台湾では大正期に入って銅像建設への反対の声が聞こえるようになると、以後大型の日本人高官像の建設は下火になっていった。しかし、銅像の存在自体が無くなった訳でなく、形態が小型化し、学校や会社といったより中規模の単位ではさらに盛んに作られるようになっていった。ここにおいて、銅像のもつ行為・モノ・場所の意味はしだいに変容していくことになる（第四章）。

このように、すでに二十世紀初期から、日本の近代彫刻は、日本が進出した東アジアの各地域と関わりを有していた。そのころから醸成されていた銅像と政治、国家権力との結びつきの表現は、1930年代以降における国家主義的な風潮を背景にさらに変化を見せる。たとえば、1934年に制作された肉弾三勇士の銅像（東京・青松寺）は、それまで無名であった一兵士が英雄となって表舞台に現れたものであった。これと同じような例が台湾においても現れる。それは、1935年の台中地震で死亡した台湾人少年の銅像、《君が代少年像》である。この銅像が、日本統治期台湾に設置された銅像のなかで、ひとつの重要な意味を持つ理由は、それまで、特定の名を成した人物のみが対象となって来た（そして、全てが日本人か西洋人であった）台湾の銅像に、被植民地者である台湾人を含めた無名の一国民が成りうる可能性が出てきたことにある。

このような、銅像のモデルにおける変化以外にも、この時期から銅像建設の行為自体に変化が訪れていた。それを示す例が、1930年代以降から1940年代初頭にかけて台湾の初等教育現場で盛んになった二宮尊徳像と楠木正成像の設置である。これらは、父兄からの寄付というかたちをとって行われることが多く、ここにおいて、初期には政府関係者や富裕層を中心に行われていた銅像建設という行為は、各地域や学校という非常に小さな単位の無名の人々の間で「自主的に」行われるようになった。そして、戦争末期には、銅像に襷をかけ、児童たちが兵隊を送り出すのと同じような儀式でもって、銅像供出がなされていた（第三章後半）。

ここで述べて来たように、日本統治期の初期・中期・後期において、銅像のもつ行為・モノ・場所の意味の変化は以下のようなになるだろう。つまり、初期においては強力な台湾

人有力者がその建設を主導し、ここでの行為の意味は、彼自身の社会的地位の保持であり、銅像のモノとしての意味は、日本人高官個人から想起される台湾統治の称揚であった。これらの銅像は、近代化し始めた都市の中心地に置かれ、新しく現れた日本による社会体制を象徴する空間の一部をなした。しかし、それらの行為は、次第に高官の退任ごとに行われる慣例行事のようになり、また、官側が主導する銅像建設や記念事業への寄付金供出額は、台湾総督府の官僚制度のなかで、俸給の等級によって割り当てられていた。つまり、こうした事業への参与は半ば義務であり、それによって政治上の忠実さを示す行為でもあったといえる。中期以降、こうした大型の銅像建設や寄付行為に批判の声が出ると、以後都市空間型の銅像は減少していった。だが、銅像を作るという行為自体は民間のなかに根付いていき、学校や会社、または富裕層が個人で銅像を制作し、または寄贈するという行為が逆に盛んになり始める。ここでは、行為・モノ・場所の意味は中型化したのが、すでに銅像制作やそのモノのあり方が特別なことではなくなり、人々や社会のなかに習慣化した時期といえるだろう。さらに、1930年代後半に入り始めると、国家主義的な風潮を背景に、無名の人間が公に殉じた例を芸術化する例が増え始め、銅像もそれに倣った。これは、それまで銅像があくまで偉大な業績のある個人の身体の再整形に重きを置いていたのに対し、ここからはその身体というよりは、それに付随した抽象的な意味がより重視されるようになったと考えられる。このような傾向は、二宮尊徳像や楠木正成像についても同様で、大量生産されるようになったこれら銅像は、その身体はすでに定型化・形式化されており、それよりも、そこから導かれる「教訓」がより重要な問題となったのである。

台湾近代彫刻の確立と日台の彫刻家たち

以上のように、本論の前半では銅像という形態の近代彫刻とそれをめぐる社会的意味について考察したが、後半では彫刻を作る側の人間である彫刻家を考察の対象とした。台湾最初の近代彫刻家とされる黄土水は、まだ台湾に近代美術家や近代彫刻家というものが存在していなかった時代に、最初にその地位を社会で確立した人物である。本論では、彼の生涯とその作品を紹介するとともに、彼の作品に現れた彫刻の「近代性」とは具体的に何を指すのかを、写生・素材・個性・モチーフといったキーワードを軸に考察した。黄土水は、東京美術学校で日本の伝統的な木彫を学ぶとともに、塑造や大理石彫刻にも習熟し、そうした素材と技法を生かして、日本の帝展にも挑戦していった。そして、作品の「個性」として、故郷・台湾を意識するようになる。こうして用いた、台湾原住民像や水牛像は、黄土水を他の日本人彫刻家と「差異化」する働きがあったが、一方で黄土水は近代西洋美術や大正期日本で普遍的に制作されていた裸体像の制作と帝展入選を通じ、近代美術という制度に参入することで、出身地に関係なく評価を受けるといって、「平等化」を手に入れていった。

黄土水の活躍は、植民地統治下において、近代教育を通じ、文化的な独自性を獲得しようとする同時代の台湾人青年に励ましを与えたが、同時にそれは日本の統治者側にとっても植民地政策を肯定する「成果」となるという、アイロニーを含んでいた。黄土水自身も、東京で身に付けた近代美術の思考法によって台湾の現況を見ると、その概念や美術作品というものが当時の台湾社会には共有されない苦しさを感じていた。また、この時代は、同時に台湾が日本帝国の「一地方」へと抑え込まれていく時期でもあり、台湾という地域の文化独自性の追求が、必ずしも民族の独立や国家レベルのそれには繋がらないという、隘路に入り込むものでもあった。そうした狭間で、黄土水は独自の芸術性の追求を続け、写実と個性、台湾モチーフの結合した晩年の大作《南国》が完成する（第五章）。

黄土水は、「彫刻」や「彫刻家」という存在がまだ社会的に確立されていない時期を生きた例であるが、第六章では引き続いて、すでにそれらがある程度社会的に認知された後、彫刻作品や彫刻家たちが、台湾と日本という二つの場所の間、および台湾社会の内部でどのように流通していたのかについて検討した。前半では、日本人彫刻家が台湾で活動した例を取り上げ、台湾総督府新庁舎建設のために来台した彫金家と彫刻家を例に、彼らが総督府の仕事以外にも、台湾での銅像制作や美術活動に関わっていたことを指摘した。彼らは当時の日本の一流の彫刻家であったとは言えないが、台湾において近代彫刻の技術を持つ人材が皆無に等しいなか、台湾で流行し始めた銅像制作を担うようになる。日本統治初期には、そもそも台湾内で銅像を始めとする近代彫刻の作品が制作できないため、これらはすべて海外や日本内地の彫刻家に依頼され、台湾へ運送されて来た。しかし、1920年代以降には、少しずつ台湾内の人材でもその需要に応えることが出来始めた。その先がけとなったのが、これら来台した日本人技術者であった。しかし、彼らは新庁舎建設という、本来の任務の事業が終了すると、日本へ帰国し、その活動は一過性のものでもあった。

その後、1930年代以降には、別のタイプの日本人彫刻家らが登場する。そのひとつが、台湾出身の日本人の例で、このうち、鮫島台器や横田七郎は、後に日本へ渡って彫刻を学び、帝展や院展に入選するようになる。彼らは日本で活動するだけでなく、台湾でも個展を開いたり、委託制作を請け負うなど、戦前期には台湾との関係を有していた。さらに、1930年代になると、日本で若手・中堅作家としてある程度の活動をしていた彫刻家らが、台湾に中期・長期的に滞在する例も見られた。彼らは、台湾での肖像彫刻の制作においてとくに活躍するようになる。このように、日本統治中期になると、台湾と内地日本の間を社会を、彫刻家とその作品が活発に回流し始めるようになるのである。

むろん、この現象は日本人彫刻家にだけ見られるものではない。黄土水の死後、第二世代ともいえる若手の台湾人彫刻家も1930年代以降活動を始め、彼らは青年時代を日本で過ごし、その彫刻技術の基礎を築いた。また、その修学先も東京美術学校だけでなく、著名な日本人彫刻家に直接弟子入りするなど、多様化し始めた。残念ながら、彼らは二十代で早逝したものもいく人かおり、また比較的長生きした人物らも、三十代頃には日本統治期の終了を迎えたため、1945年以前の活動と作品は限られている。しかし、こうした人材の

多様化は、それまで画家のみであった美術団体に彫刻家が参加するなど、台湾内の美術活動に厚みを加えることになる。とくに、台陽美術協会が西洋画部・東洋画部以外にも、1941年に彫刻部を設置したことは、1945年以後の省展の三部制にも直接的に影響したといえるだろう。

本論でも述べたように、日本の近代彫刻は東京を中心としており、こうした「東京」と「地方（故郷）」の構造は、台湾からの彫刻家にもそのまま当てはまっている。台湾人彫刻家、また台湾で育った日本人彫刻家も、ほぼみな日本の東京へと渡っていった。そして、東京での修学期や展覧会入選を経た後も、多くが東京に留まった。むろん、彼らは休暇等を利用して台湾でも展覧会を開催するなどをしているが、近代美術の制度のなかで、台湾はあくまで東京を中心とする構造のなかの下位の場所として位置づけられ、とくに台湾内の官設美術展覧会を有しなかった近代彫刻の分野では、それが顕著であったように思われる（第六章）。

本論文の課題として一日本統治期台湾人の経験とは

本論文では、日本統治期の資料を使用しながら、当時の銅像や彫刻家について述べて来た。また、とくに第四章では、「一般市民」の銅像に対する見方や意見などについても論じようと試みた。しかし、本論のなかでは、明確な答えが出せなかった部分もある。それは、こうした時代のなかで、台湾の人々が日本人高官の銅像をどのように感じ、こうした銅像建設をどのような経験としていたのか、という点である。本論文で使用した資料の多くが、当時発行された日本語の新聞、書籍、公文書等であり、日記が翻刻されている林献堂のようなケースを除き、台湾人側の銅像に対する意見や感情を論じえる資料は、現在のところ十分に発掘出来なかった。そのため、本論文の内容は日本側資料に大部分を依拠した偏りを持つものとなっている。しかし、この台湾人にとっての銅像や近代彫刻の経験という側面は、本来であれば本論文の重要なテーマであるため、以下、不十分ながらこの点に関する筆者なりの考察を示しておく。

銅像は、人物または事象（出来事）を記念するものであるが、それは言い換えると、その社会集団における歴史や社会のひとつの解釈の表現であり、この解釈というものを半恒久的に伝えるためのものがモニュメントであるといえる。しかし、こうした「解釈」を、当時の台湾人が自由に行い、自由に銅像が建てられたわけではない。遊佐徹氏は、中国近代の銅像について興味深い指摘を行っており、それは1906年に上海に建立された李鴻章像をきっかけに、中国人がみずから手で銅像を制作し、建立することを考えるようになったという。それ以前にも、上海には西洋人像が立っていたのだが、それらは中国人にとって、自らのものとは感じられず、李鴻章像によって初めて銅像が中国人にとって「自己化」

することになった¹。このような指摘をふまえると、銅像そのものの必要性はさておき、台湾人は日本統治下において、多くの人々が「自らの身体」と感じられるような銅像を持ってなかったはずである。台湾人は、銅像の対象となること、また日本語新聞などで当時活発に行われていた、銅像建設の是非をめぐる言論に参加することからも疎外されていた。僅かに参加できる余地というものは、比較的裕福な台湾人として銅像建設資金の寄付者となり、除幕式に参加することであった。しかし、そうして建設された銅像のほとんどが日本人の像であり、除幕式も多くが日本人主導のものであった。第六章で取り上げた、彫刻家の陳在癸による言葉のように、台湾人は銅像建設においても、「公式権」を全く認められていない現状があったのである。

また、銅像は、すべての市民が意思決定に参加して、建設されたものではない。にもかかわらず、それらの多くが公共空間に設置されたため、一般の人々があずかり知らぬところで、銅像はある日街角に建設され、人々は半ば強制的に「観る側」へと参与させられる。こうして現れた銅像の「観衆」または「受容者」は、展覧会や博覧会にみるような、そこへ参与するかが決められる、選択的な行為によって現れた「観衆」とは、異なる性質を持っている。この点を考慮すると、銅像はその特性として、あらゆる人々を観る側へと参与させるような、ある種の強迫性を最初から含んでいたといえる。

千葉慶氏は、戦前の偉人像としての「公共彫刻」は、日本で十九世紀末に初めて登場した時点では、「公共の場」に作られたのではなく、その設置された場所を「公共の場」へと変じさせる装置であったと指摘している²。本論で述べたように、台湾に銅像が導入された際の背景には、銅像が「公共の場」に建てられるものである、という概念が先行して存在していたように思われる。そのため、この指摘は日本統治期台湾においては、必ずしも当てはまらない。また、日本統治下の台湾では、台湾人・日本人間の台湾統治の歴史における共通認識はおろか、在台日本人でさえも、台湾統治の歴史において活躍した銅像の主の名前を知らなかったことは、本論中にも指摘した。そのため、日本統治期台湾の多くの銅像が、千葉慶氏のいうような、「人々に共通の「国民」(nation)としての意識を共有させるメディア³」という存在には、なり損ねた可能性がある。だが、ここで言われる、「公共の場」へと変容させる力という指摘は、ひとつ重要なものであろう。

つまり、銅像の持つ、不特定多数の「観る者」への強迫性を、千葉氏の言う「公共の場」へと変化させる力、または、さらにそれを「公共性」への動員と言い換えると、その特性は、台湾においては、日本統治の後期になるにつれ、強化されて利用されるようになった。

¹ 遊佐徹『蠟人形・銅像・肖像画：近代中国人の身体と政治』（白帝社、2011年）、第3章「銅像：上海、徐家匯の李鴻章の銅像」を参照。

² 千葉慶「公共彫刻は立ったまま眠っている—神武天皇像・慰霊碑・八紘一宇の塔」小田原のどか編著『彫刻 SCULPTURE 1—空白の時代、戦時の彫刻／この国の彫刻のはじまりへ』（トポフィルム、2018年）、101-102頁。

³ 同上、102頁。

部落振興運動を背景とし、小さな地域、初等学校等の小さな単位といったように、それまで大きな都市の公園などを舞台としていた銅像の「公共空間」は、より微細化されていった。こうした、人々の生活空間のなかの小さな単位の縛りのなかで、島内の一般の人々は、銅像を見るだけでなく、さらには寄付金を供出し、それ設置する側にも立つように変化した。こうした現象が、社会が団結性を要求する時代に沿って発生していったのである。ただし、そこで建設された二宮金次郎像などの銅像もまた、台湾人が自主的に選択した主題では無く、一般の人々は日本統治期の後期になって、銅像を建設する側にまわったとしても、そこに選択的な余地はほとんどなかったことに留意すべきである。

こうした銅像にみるような、台湾人として「われわれ」の物語を持ってないという現象は、近代美術の一部としての近代彫刻の分野においても見られた。黄土水をはじめとする台湾人彫刻家らは、みな青年期に東京に渡り、なかには共産主義に傾倒した人物がいた一方、政治とは距離を置いていたものまで、その立場は一様ではない。だが、みな何かしら日本の統治下にある台湾の現状を意識していた証言を残している。また、そのことは、彼らが日本で制作・発表した多くの作品が、その主題や題名から見て、台湾と関わるテーマのものであったことから明らかである。彼らは、日本の美術界と故郷台湾とを往還しながら制作を続け、生活のためもあって、名士の銅像制作を請け負うものが多かった。この時期、黄土水によって、日本統治期において初めて、台湾人彫刻家の制作した銅像が台湾の公共空間に設置された。だが、この銅像の像主は日本人である。これは、同時代に、日本人彫刻家の手によって日本人像が作られ、または中国人彫刻家によって中国人像が作られ、大々的に公共空間に設置されたのとは異なる、ねじれた現象が生じていたといえる。

他方、1930年代以降、台湾人上流階層による銅像制作が増えることで、富裕層の私的所有物という限られた範囲ではあるが、銅像や近代彫刻作品は、島内でいわば消費の対象ともなり始めた。本論では、顔雲年、楊肇嘉、林獻堂という、当時の台湾を代表する人物とその家族を取り上げたが、彼ら以外にも、台湾人富裕層は、日本人作家だけでなく、後期には台湾人の若手彫刻家にも依頼して、銅像を制作するようになった。このため、日本統治後期には、一部の台湾人の間で、台湾人による台湾人の像が存在し始めていた。さらに、こうした台湾人富裕層は、とくに自身の父母の銅像を好んで制作している点から、その背景には台湾の伝統的な祖先崇拜、先祖供養の思想があったのではないかと考えられる。つまり、民間の台湾人上流層においては、銅像制作の意味が一部台湾化していたともいえるのである（第四章四節）。

こうした日本統治期の社会における銅像および彫刻作品が、光復後の台湾社会にどのように影響したかについては、本論の手に余るものであり、非常に漠然とした推論しか出来ない。だが、こうした銅像への身体感覚（畏敬、抽象化、揶揄…）は、実は今日の社会に生きる我々のなかにも薄れながら継続しており、それは日本においては明治以降、台湾においては日本統治期以降に生じた新たな社会的体感であったといえる。そして、1945年以降、日本人高官の銅像や学校の二宮金次郎像と取り替わるかのように、今度は孫文や蒋介石

石の銅像が台湾の各都市や学校に大量に普及していった。それを考えると、台湾において、台湾の人々が「自らの身体」と感じられ、「われわれの物語」を代表するものとしての銅像が欠如した状態は、日本統治期以後も継続していったと思われる。

(二) その後の銅像のゆくえと今後の課題

光復と日本統治期の銅像たち—『林猷堂日記』より

本論では1895年から1945年8月までを範囲として、この期間に設置された数々の銅像や日台の彫刻家の活動について論じて来た。本論文の射程を超えるものではあるが、1945年以降の日本統治期の銅像の行方について簡単に整理し、本論の内容が現在の台湾および日本の現状とどのように関連してくるかについて、最後に言及しておきたい。

第三章の最後では、日本統治末期の金属回収の流れを整理した。当初、1942年秋頃までは、公共空間における大型の銅像は供出の対象から除外されていたが、1943年中には個人所有のものを含むほぼ全ての銅像の撤去の方針が固められた。それにより、1944年夏頃には全島において銅像の供出が進められ始めたとみられる。それは、樺山資紀像から後藤新平像まで、どのような地位にあった銅像も平等であった。つまり、日本統治期の銅像は、その後の日本の敗戦と中華民国の台湾接収とは無関係に、日本統治期終了前にすでに撤去されていたのである。

しかし、奇妙なことに、日本統治時代に作られた銅像のいくつかは、2010年代の現在においても何件か現存していることが知られている。今日、このような例として有名なものに、国立台湾博物館所蔵の児玉源太郎・後藤新平像（1915年設置）、嘉南大圳工事で有名となった台湾総督府技師・八田與一像（1931年設置）などがある。これらはブロンズ製であり、かつ日本統治期にすでにその存在が有名な像であって、同時期の金属回収を免れ得たとは考えられない。実際に、八田與一像は1944年12月に回収されたが、鑄つぶされずに戦後になって再発見され、烏山頭管理事務所に保管されていたものとされる。また、近年になって、この他にも銅像が再発見された例がいくつかある。こうした例からは、少なくとも数の銅像が金属回収に供されながら、そのままのかたちで終戦を迎えたものと推測されるのである。資料上、その経緯が最も明確に追跡できる例が、林猷堂の父・林文欽の銅像である。

先述のように、林猷堂は1935年に日本人彫刻家の後藤泰彦に依頼して父の銅像を自邸の庭に設置し、その後散歩の際に参拝するのが恒例となっていた。しかし、金属回収の徹底化が全島におよんだ1944年9月に、林猷堂の兄・林烈堂の銅像と父・林文欽の銅像二体が台中の林家から回収されてしまった。だが幸運なことに、別れを惜しんでいた父・林文欽の銅像は、そのまま壊されずに残っていたことが、光復後になって判明した。保管されていたのは、台中豊原の鉄工場であった。林猷堂は1945年12月上旬に銅像を再び家に迎え

入れると、新暦1月1日午前に親族らと一緒に帰還式を執り行った⁴。林献堂は1946年6月には人を台中の豊原鉄工場（安全鐵工場）に派遣して、鉄工場の工場主に保管料として三百元を払っている⁵。

こうした記述に続き、林献堂の1947年4月15日の日記によると、この日に台中市内の彰化銀行で会議があり、林献堂は朝から台中に向かった。この会議上で監査人の沈有智から、坂本素魯哉（元・彰化銀行頭取）の銅像が屋上に置かれているが、誰かに見られてはよくないとの発言があり、役員はいく人かもこれに賛成して、これを倉庫に移そうという意見が出された。これに対し、林献堂は、坂本はたしかに外国人だが、彰化銀行の功労者であるので、屋上に置いておいても支障がないだろうとの意見を述べている⁶。坂本の銅像は、1938年に彰化銀行に設置されていたが、金属回収のため1944年9月17日に銀行で告别式が挙行されていた。坂本の銅像が最終的に回収されなかったのか、または林文欽の銅像と同じくその後どこかで発見され、また銀行に戻されたのかは定かでない。だが、この日記の記述からは、この坂本像も光復後の1947年4月時点では鋳つぶされずにそのまま残っていたことが分かる。だが、ここで議題にのぼった坂本の銅像がその後どうなったかは、現時点では不明である。銅像をそのまま保管することを勧めた林献堂も、1949年には台湾を離れて日本に渡り、1956年に東京で客死する。日本統治期に坂本の銅像が置かれていた台座は彰化銀行内にそのまま残され、1953年に台湾人彫刻家・陳夏雨によって林献堂の胸像が造られると、その台座の上に林献堂像が設置された。この林献堂の銅像と日本統治期の台座は、現在も台中の彰化銀行（現・彰化銀行總行及行史館）の中庭に現存している。

このような例から考えると、日本統治期の多くの銅像は最終的に1944年秋頃から年内にかけて回収されたか、またはされようとしたのだが、金属利用に回される前に日本の敗戦が決まってしまった。そのため、1945年8月以降も、意外にも多くの銅像がそのままの姿で台湾に残されていたものと思われる。林献堂の父の像は私的に制作した銅像であり、父親への思い入れ深い像であっただけに、林献堂は喜んで引き取りに向かい、保管していた相手に謝礼を払うだけの財力もあった。だが、他の日本人像や、所有者が誰と特定できないようなものについては、どうだったであろうか。とくに、政局の変化によって、日本人像を手元に保管していることに台湾人側が不安を抱いていたことが、先述の彰化銀行の役員同士のやり取りからも分かる。そのため、たとえ金属回収を逃れても、引き取り手のないままにその後行方知れずとなったものが、恐らく少なくなかったはずである。また、一部の銅像は処分の仕様がなく、しかし人目につくことも恐れて倉庫に奥深くしまわれていたため、今日再発見されたという可能性が高い。

⁴ 『灌園先生日記』1946年1月1日、『臺灣日記知識庫』（中央研究院臺灣史研究所）。

⁵ 『灌園先生日記』1946年6月26日、『臺灣日記知識庫』（中央研究院臺灣史研究所）。

⁶ 『灌園先生日記』1947年4月15日、『臺灣日記知識庫』（中央研究院臺灣史研究所）。

再展示される歴史と銅像—1990年代以降の台湾社会と日本統治期の日本人像

以上のように、日本統治期の終わりは、この時代に建てられた銅像たちを最終的に台湾の公共の場から消し去った。しかし、銅像というものの存在自体は、1945年以降にもその対象を替え、長く台湾に存続することになる。それは、たとえば孫文像や蒋介石像であり、例えば、蒋介石像は1946年12月に台北の監察院前に設置され、孫文像は1949年10月に台北・中山堂の前に設置された。その際、日本統治期に設置された多くの記念碑と同様に、銅像の台座も像を入れ替えそのまま利用されている（蒋介石像は大島久満次像の台座、孫文像は祝辰巳像の台座）。また、この二体の銅像を制作したのは、第六章で取り上げた戦前に日本の朝倉塾で学んだ蒲添生であった。

だが、こうして姿を消した日本人銅像のなかで、銅像が保存され続けた例もいくつかある。そのなかで、最も有名といってもよいものが、先にも挙げた八田與一像であろう。八田與一は1886年に現在の石川県金沢市に生まれ、第四高等学校および東京帝国大学工科大学土木課を卒業、1910年に台湾総督府土木部の技手となった。その後、1920年から嘉南大圳建設工事に携わり、1930年の完成まで従事した。嘉南大圳竣工の1930年にそれまで工事に携わった技師や労働者の間で交友会が作られ、その会長に八田與一が就任、同年に工事中の事故や病気で死去した人々134名を慰霊する竣工碑が建設された。これには、日本人・台湾人の区別なく死者の名前が刻まれ、交友会長・八田與一の名前で碑文が記されている。さらに、この交友会で八田與一の業績を記念するため、銅像の制作が計画された。八田自身は当初はこれを辞退したが、その後八田の希望で作業着服で自然な姿をした像ということで、台座を持たない座像の銅像に決まったという。この像の制作は、当初は石川県金沢市出身の彫刻家・吉田三郎（1889-1968）に依頼されたようだが、その後その後輩で同じく金沢出身の都賀田勇馬（1891-1981）が制作に当たった。像は翌年の1931年7月31日に贈呈除幕式が行われ、台湾の烏山頭ダムの珊瑚潭を見下ろす丘に設置された⁷。【銅像図版 26】

八田與一はその後1942年に南方開発のためにフィリピンに派遣された途上で、アメリカの魚雷攻撃によって遭難死する。銅像は戦争末期の金属回収で一旦撤収されたが、敗戦後に日本人の少年が台南で発見し、戦前の嘉南大圳組合から名前を変えた嘉南農田水利協会がこれを買戻して保管することになった⁸。その後、1981年に銅像は烏山頭ダム付近の丘にあった八田與一夫妻の墓の前に再設置され、その後この前で挙行される墓前祭には日本の交流協会や日本からの団体が参加するようになった。この墓前祭は現在まで続けられている【銅像図版 26】。

⁷ 八田與一については、古川勝三『台湾を愛した日本人—土木技師 八田與一の生涯』改訂版（創風社出版、2009年）、胎中千鶴『植民地台湾を語るということ 八田與一の「物語」を読み解く』、清水美里「日本と台湾における「八田與一」教材化の方向性」『史海』第六十四号（2017年）等を参照した。

⁸ 前掲、古川勝三『台湾を愛した日本人』改訂版、238-289頁。

八田與一像の顕彰は、民間において比較的早い時期に始まっていた例であるが、2000年代になると、台湾内での銅像に対する処遇に、新たな動きが見られるようになった。その大きなものは、蒋介石像への忌避感である。2000年に台湾桃園県には「慈湖紀念雕塑公園」が開幕し、ここには台湾全土から公共の場所にあった蒋介石像が送られるようになった。現在では、二百体以上の蒋介石像が集まっているという。さらに、2008年に国立台湾博物館がリニューアルした際、それまで博物館倉庫に保管されていた新海竹太郎作の《児玉源太郎・後藤新平像》が、常設展示としてひとつのコーナーを与えられるようになった。また、2014年には花蓮で《近藤久次郎像》が、2015年には台南で《児玉源太郎像》の頭部が発見されるなど、完全に失われたと考えられていた日本統治期の銅像が相次いで見つまっている。さらに、2017年には、台北植物園にかつてあった、《フォーリー像》(1917年)と《早田文蔵像》(1936年)が新たに再建されて設置された。

1945年以降、今日まで残されていた銅像たちは、八田與一像のように積極的に保存を意図していたものもあるが、多くは恐らく処分に困り、倉庫などに秘蔵され忘れ去られたまま、偶然再発見された。これらは、戦後の政治転換のなかで、いわば「消極的保存」が行われて来たといえる。そうした状況は、2000年代から2010年代にかけて大きく変化した。日本統治期の銅像たちは発見され、展示され、さらにメンテナンスを施されるなど、「積極的保存」を行う方向へと変わり始めたのである。そして、このような活動は、近年では保存のみならず、先に挙げたように、失われた銅像を再設置するような「再現」の段階にまで入り始めた。これら、日本統治期の建築物やモノの再建活動は、政府主導のものであったり、政治的な活動というわけでは必ずしもない。それらの多くは、現場の人々の善意によって支えられたもので、民間の日台交流に一役買っているといえるだろう。

本論中に述べたように、銅像の主の名前やそれにまつわる歴史的エピソードの忘却は、実際には日本統治期においても問題になっていた。そのため、こうした銅像たちは、当時においても、人々に何かを働きかける強制力が必ずしも強かった訳ではない。だが、先述したように、台湾人の銅像をめぐる言論の不在、台湾人像の公共空間における不在、そして、台湾人による銅像建設が「公式な」ものとしては認められないといった、見えない規制がそこには存在していた。当時を生きていた人々がほとんど鬼籍に入ってしまった現在、モノや制度とそのなかに置かれた人々の生々しい感情が薄れていくなかで、こうした日本統治期の銅像たちにはどういった歴史的背景があり、どういった社会環境のなかで生み出されたのかを明らかにすること、そこに歴史家の役割があるだろう。

初出一覧

本論文の内容の一部は、以下の論文の内容が反映されている。

- 「日本の植民地統治と台湾の「銅像」建設」東京大学人文社会系研究科文化資源学研究専攻修士論文、2012年12月提出。
- 「日本統治期の台湾人彫刻家・黄土水における近代芸術と植民地台湾—台湾原住民像から日本人肖像彫刻まで」『近代画説』（明治美術学会誌）第22号、三好企画、2013年12月、168～186頁。
- 「日本殖民統治與裝飾壁畫—岡田三郎助〈臺灣總督府壁畫〉再考」『2014 台灣史青年學者國際學術研討會』、國立政治大學台灣史研究所、東京大学総合文化研究科ほか、2014年3月、頁番号なし。
- “Building Statues of Japanese Governors: Monumental Bronze Sculptures and Colonial Cooperation in Taiwan under Japanese Rule“, The proceedings of the 2013 UCSB International Conference on Taiwan Studies, Center for Taiwan Studies, University of California, Santa Barbara, 2014, pp. 179～196.
- 「近代雕塑上の「傳統」與「現代性」：黄土水從初期木雕作品到臺灣文化批判之背景」『波瀾中的典範—陳澄波暨東亞近代美術史國際學術研討會 會議資料』、中央研究院台灣史研究所ほか、2015年1月、頁番号なし。
- 「邁向近代雕塑的路程—黄土水於日本早期學習歷程與創作發展」『雕塑研究』第14期、朱銘美術館（台湾新北市）、2015年9月、87～132頁。
- 「日治時期臺灣的紀念碑建設與日本近代雕塑家：以大熊氏廣〈臺灣警察官招魂碑〉（1908）為中心」『現代美術學報』第30期、台北市立美術館、2015年11月、159～189頁。
- 「日本統治期台湾における銅像受容に関する一考察」『日本植民地研究』（日本植民地研究会学会誌）第32号、2020年6月、38～57頁。

謝辞

本論文の執筆に関しては、多くの方々から御指導・御協力を賜りました。博士課程の指導教員である三ツ井崇先生には、いく度も停滞する筆者の論文執筆過程に根気よく向き合い、その都度的確なアドバイスを頂きました。学生を支える姿勢を常に見せて下さったことで、論文提出までたどり着くことが出来ました。また、博士論文審査の副査となって下さった、月脚達彦先生、岩月純一先生には、他の地域研究をふまえた広い視点からのコメントを頂きました。同じく副査として、東京藝術大学時代の指導教員でもある佐藤道信先生、博士課程在学中に早稲田大学でのゼミにも参加させて頂いた若林正文先生には、お忙しいなか、細かな部分にまで目を通した丁寧なアドバイスを頂きました。

台湾美術史研究を始めた約十年前、そして博士課程での二度目の台湾滞在中には、中央研究院の顏娟英先生およびその門下生の方々と共に、資料読解の会や訪問調査に同行する機会を頂きました。このことは、筆者の台湾美術史研究における貴重な思い出と経験になっています。

さらに、本研究は、以下の方々をはじめとする多くの個人・機関の御厚意によって見学することが出来た、重要な作品や資料によって成り立っています。御協力を頂いた方々に、心より感謝申し上げます。(順不同、敬称略、所属は当時)。

板寺一太郎・慶子夫妻、呂興忠・胡彩蓮夫妻(彰化高等中学校)、山本修巳氏、景山郁子氏、林炳炎氏、邱文雄氏、陳昭明氏、李文清氏、立花義彰氏、川平朝清氏、吉田千鶴子氏(東京藝術大学)、蒲浩明・蒲子超氏(蒲添生遺族)、陳琪璜氏(陳夏雨遺族)、林振廷・陳碧真夫妻(霧峰林家頤園)、劉家鑫氏(天津理工大学)、長栄中学校史館、台南神学校、陳中和記念館、西条市役所、佐渡市役所、川口市立文化財センター分館郷土資料館、後藤新平記念館(奥州市)

また、本研究に関わる資料や情報の提供、現地調査への同行、中国語の校正等、個人的に様々な助力をして下さった以下の方々に、厚く御礼申し上げます。(順不同、敬称略)

朱家瑩、吳景欣、林以珞、陳以凡、詹凱琦、邱函妮、Magdalena Kolodziej、清水美里

なお、博士課程在学中および本論文執筆中に、以下の研究助成を頂きました。当該機関および関係者の皆様に心より感謝申し上げます。(受領年度順)

国立交通大学 NCTU Taiwan Elite Internship Program (2014 年)、韓国中央博物院 NMK Museum Network Fellowship (2015 年)、日本学術振興会特別研究員奨励費 (2015-2016 年度)、中央研究院歴史語言研究所博士候選人培育計画 (2017 年度)、三島海雲記念財団学術研究奨励金 (2018 年度)、台湾奨助金 (2019 年度)

最後に、学生生活を共にした多くの友人たち、そして長い学生期間を支えてくれた両親および家族に感謝の意を表します。

参考文献表

〈凡例〉

・全体の構成は以下のようである。

I. 全体文献

1. 一次資料（主として 1945 年以前のもの）

(1) 新聞 (2) 定期刊行物 (3) 公文書、未刊行史料等 (4) 出版物

2. 二次資料（主として 1945 年以後のもの）

A. 中文文献 (1) 書籍 (2) 論文等 (3) 展覧会図録、資料集、写真集、辞典、その他

B. 日文文献 (1) 書籍 (2) 論文等 (3) 展覧会図録、資料集、写真集、辞典、その他

C. その他外国語文献

3. ウェブサイト、データベース

A. 中文（台湾・中国）

B. 日文（日本）

C. その他海外

II. 作家別文献

・本論文中に取り上げた日本人、台湾人彫刻家別に生年順に配列し、以下の様に構成した。

・活動が多岐にわたる作家については 1945 年以前の台湾と関連するものを中心に、資料の少ない作家については、制作作品に関するもの、参加した展覧会に関するものなどを幅広く採用した。

1. 一次資料 (1) 新聞 (2) 定期刊行物 (3) その他

2. 二次資料 (1) 書籍・図録等 (2) 論文・定期刊行物

I. 全体文献

1. 一次資料（主として 1945 年以前のもの）

(1) 新聞

『大阪朝日新聞』（朝日新聞記事データベース 聞蔵 II）

『大阪毎日新聞』（毎日新聞記事データベース 毎索）

『大阪朝日新聞 台湾版』（坂本悠一監修・編集『朝日新聞外地版』ゆまに書房）

『大阪毎日新聞 台湾版』（坂本悠一監修・編集『毎日新聞外地版』ゆまに書房）

『興南新聞』（復刻版、台北市：莊東方文化書局、1997 年）

『申報』（申報（1872-1949）資料庫）

- 『台南新聞』（吳青霞總編輯『台南新聞』台南市：臺灣史博館、南市圖、2009年）
- 『台湾新聞』（光芸社製マイクロ、1991年／台湾協会製作・ニチマイ撮影版マイクロ、1993年）
- 『台湾新報』（南部版、台南市：台湾新報社、光芸社製マイクロ）
- 『台湾日日新報』（データベース「大鐸版」／「漢珍版」）
- 『台湾民報』『台湾新民報』（陳曉怡總編『臺灣新民報 復刻精裝版』臺南市：國立臺灣歷史博物館、國立臺灣文學館 2015年／「臺灣新民報檢索系統」國立臺灣文學館）
- 『東京日日新聞』（毎日新聞記事データベース 毎索）
- 『東京朝日新聞』（朝日新聞記事データベース 聞蔵Ⅱ）
- 『新高新報』（マイクロ、台北市：國立臺灣大學圖書館、1989年）
- 『南瀛新報』（マイクロ、台北市：國立臺灣大學圖書館、1989年）
- 『東台湾新報』（花蓮港市：東臺灣新報社、1941-1942年、中央研究院人文社會聯圖影印特藏版）
- 『南日本新報』（マイクロ、臺北市：國立臺灣大學圖書館、1989年）
- 『読売新聞』（読売新聞記事データベース ヨミダス歴史館）

(2) 定期刊行物

- 『官報』
- 『新台湾』（台北市：新台湾社）
- 『太陽』（東京：博文館）
- 『台日グラフ』（台北市：台湾日日新報社）、陳怡宏編輯『現存臺日畫報復刻』國立臺灣歷史博物館、2017年～2019年
- 『台北文物』（台北市：台北市文献委員会）
- 『台湾教育』（台北市：台湾教育会）
- 『台湾教育会雑誌』（台北市：台湾教育会）
- 『台湾警察時報』（台北市：台湾警察協会）
- 『台湾建築会誌』（台北市：台湾建築会）
- 『台湾時報』（台北市：東洋協会台湾支部）
- 『台湾婦人界』（台北市：台湾婦人社）
- 『旅と運輸』（台北市：台湾交通問題調査研究会）
- 『中央美術』（東京：中央美術社）
- 『東京美術学校一覽』（東京：東京美術学校）
- 『東京美術学校校友会月報』（東京：東京美術学校）
- 『美術新報』（東京：畫報社）
- 『府報』（台北市：台湾總督府）
- 『文芸台湾』（台北市：文芸台湾社）

『まこと』（台北市：台湾三成協会）
 『民俗台湾』（台北市：東都書籍台北支店）
 『黎明』（台北市：台湾教育会社会教育部）
 『The Japan Times』（The Japan Times Archives, 1897-1970）

(3) 公文書、資料集、未刊行史料、図録等

『大熊氏廣作品集』東京図案印刷、1936年（原所蔵者：大熊治昭、埼玉県川口市教育委員会所蔵）

『児玉後藤記念博物館写真帖』（奥州市立後藤新平記念館所蔵）

『児玉総督寿像序幕式写真帖 於高雄大正十三年夏』（奥州市立後藤新平記念館所蔵）

『後藤男爵閣下寿像建設概要』（奥州市後藤新平記念館所蔵）

『皇紀二千六百年 私立淡水中学校第二回卒業記念写真帖』淡水中学校、1941年

『震災美談君が代少年』震災美談君が代少年刊行会、1936年

「高木友枝関連資料」（高木友枝遺族旧蔵、彰化高校図書館所蔵）

『台湾総督府公文類纂』（台湾中央研究院台湾史研究所典蔵）

『台湾大年表』（台湾経世新報社編復刻版）緑蔭書房、1992年。

『台湾修学旅行報告書』福建省立甲種農業学校、1915年。

東京美術学校編『近代美術関係新聞記事資料集成』（マイクロフィルム、ゆまに書房、1991年）

西川満編『版画 台湾絵本』1943年（復刻版）。

文部省編『帝国美術院美術展覧会図録』審美書院、1919-1934年。

文部省編『文部省美術展覧会図録』巧芸社、1937-1939年。

文部省編『紀元二千六百年奉祝美術展覧会図録』美術工芸会、1940年。

文部省編『文部省美術展覧会図録』美術工芸会、1942-1943年。

(4) 出版物

青木繁『森林生活者の手記』台北市：文明堂書店、1926年。

秋沢次郎『台湾匪誌』台北市：台法月報発行所、1924年。

石坂莊作編『基隆港』台北市：台湾日日新報社、1917年。

石坂莊作『おらが基隆港』台北市：台湾日日新報社、1932年。

杉本良『台北十二箇月（再版）』日本エスペラント学会台湾支部、1926年。

西郷都督樺山総督記念事業出版委員会編『西郷都督と樺山総督』台北市：西郷都督樺山総督記念事業出版委員会、1936年。

勝山吉作編『台湾紹介最新写真集』台北市：勝山写真館、1931年。

片山清夫編『皇紀二五九六年五月版 大高雄建設論と市の現勢』高雄市：南海時報社高雄支局、1936年。

- 辜顯榮翁伝記編纂会編『辜顯榮翁伝』台北市：辜顯榮翁伝記編纂会、1939年。
- 近藤浩一路『校風漫画』東京：博文館、1917年。
- 台湾総督府内務局編『史跡調査報告 第1輯 北白川宮能久親王御遺跡』台北市：台湾総督府内務局、1935年。
- 芝忠一編『新興の高雄』高雄：新興の高雄発行所、1930年。
- 始政四十周年記念台湾博覧会編『始政四十周年記念台湾博覧会写真帖』始政四十周年記念台湾博覧会、1936年。
- 鹿又光雄編『始政四十周年記念台湾博覧会誌』始政四十周年記念台湾博覧会、1939年。
- 宿利重一『児玉源太郎』（第四版）東京：対胸舎、1940年。
- 杉山靖憲編著『台湾名勝旧蹟誌』台北市：台湾総督府、1916年。
- 台中市役所編『台中市概況 昭和11年版』台中市：台中市役所、1936年。
- 台北市役所編『台北市政二十年史』台北市：台北市役所、1940年。
- 台湾写真会編『台湾写真帖 第二集』台南：台南新報社、1914年。
- 台湾神社社務所編『台湾神社略誌』台北：台湾神社社務所、1937年。
- 台湾総督府警務局編『台湾総督府警察沿革誌 第三編』台北市：台湾総督府警務局、1934年。
- 台湾総督府警務局編『台湾警察遺芳録』台北市：台湾総督府警務局、1940年。
- 台湾総督府警務局編『台湾衛生要覧 大正14年度版』台北市：台湾総督府警務局、1925年。
- 台湾総督府交通局鉄道部編『台湾鉄道旅行案内』台北市：台湾総督府交通局鉄道部、1935年。
- 高雄州教育会編『高雄州地誌』高雄：高雄州教育会、1933年。
- 高雄市役所編『高雄市勢要覧』高雄市：高雄市役所、1931年。
- 高雄市役所編『高雄市要覧 昭和11年度』高雄市：高雄市役所、1937年。
- 田中一二『台北市史』台北市：台湾通信社、1931年。
- 高村光太郎『某月某日』東京：龍星閣、1943年。
- 春山行夫『台湾風物誌』東京：生活社、1942年。
- 服部直吉『尾張の生んだ水野遵』名古屋：澶南莊、1937年。
- 松木幹一郎伝記編纂会編『松木幹一郎』東京：後藤曠二、1941年。
- 村崎長昶『台北写真帖』台北市：新高堂書店、1913年。

2. 二次資料（主として1945年以後のもの）

A. 中文文献（筆者画数順）

(1) 書籍

- 呂紹理『展示臺灣：權力、空間與殖民統治的形象表述』台北市：麥田、2005年。
- 林吉崇『臺大醫學院百年院史 上冊 日治時期（一八九七—一九四五年）』台北市：國立臺灣大學醫學院出版、1997年。
- 邱函妮『灣生・風土・立石鐵臣』台北市：雄獅、2004年。
- 李欽賢『臺灣的風景繪葉書』臺北縣新店市：遠足文化、2003年。

- 李淑珠『表現出時代的「Something」：陳澄波繪畫考』台北市：典藏藝術家庭、2012年。
- 吳文星『日治時期台灣的社会領導階層』改訂版、五南圖書出版社、2008年。
- 周文龍（Joseph R. Allen）著／陳湘陽·蔣義譯『錯置臺北城』台北市：麥田、2018年。
- 周婉窈『海行兮的年代－日本殖民統治末期臺灣史論集』台北市：允晨文化、2002年。
- 陳培豐『「同化」の同床異夢：日治時期臺灣的語言政策、近代化與認同』台北市：麥田、2006年。
- 森宣雄·吳瑞雲『臺灣大地震：1935年中部大震災紀實』台北市：遠流、1996年。
- 陳柔縉『臺灣西方文明初體驗』台北市：麥田、2005年。
- 應大偉、吳小虹『鐵道歲月經典：台灣鐵道寫真 台鐵機動車輛小史』台北市：田野影像、1997年。
- 廖瑾瑗『背離的視線：台灣美術史的展望』台北市：雄獅圖書、2005年。
- 靜思『辜顯榮傳奇』台北市：前衛、1999年。
- 韓興興撰稿『臺中市市定古蹟臺中公園湖心亭調查研究與修復規畫』臺中市：臺中市政府、2002年。
- 顏娟英『水彩·紫瀾·石川欽一郎』台北市：雄獅、2005年。
- 謝國興·鍾淑敏·籠谷直人主編『茶苦來山人の逸話：三好德三郎的臺灣記憶』台北市：中央研究院台灣史研究所、2015年。
- 蘇碩斌『看不見與看得見的臺北』（修訂一版）、台北市：羣學、2010年。

(2) 論文等

- 方建能、李永裕「集體記憶物件的非破壞性檢測－以國立臺灣博物館戶外裝置之「銅牛」為例」『國立臺灣博物館學刊』69卷3期、2016年9月。
- 王學新「從辜顯榮與送迎總督活動談本島人士紳在官方儀式中的角色」『台灣文獻』第62卷4期、2011年。
- 吳文星「辜顯榮與鹿港辜家之崛起」『國史研究通訊』2012年6月。
- 朱家瑩「臺灣日治時期的西式雕塑」臺灣大學藝術史研究所碩士論文、2009年。
- 李品寬「日治時期臺灣近代紀念雕塑人像之研究」臺灣師範大學臺灣史研究所碩士論文、2009年。
- 宋曉雯「日治時期圓山公園與臺北公園之創建過程及其特徵研究」台灣科學大學碩士論文、2003年。
- 邱函妮「街道上的寫生者－日期時期的臺北圖像與城市空間」臺灣大學藝術史研究所碩士論文、2000年。
- 邱函妮「陳澄波繪畫中的故鄉意識與認同－以《嘉義街外》（1926）、《夏日街景》（1927）、《嘉義公園》（1937）為中心」『國立台灣大學美術史研究集刊』33期、2012年9月。
- 邱函妮「創造福爾摩沙藝術－近代台灣美術中「地方色」與鄉土藝術的重層論述」『國立台灣大學美術史研究集刊』37期、2014年9月。

夏亞拿「暗潮洶湧的藝壇：戰後初期台灣美術的動盪與重整（1945-1954）」台灣大學藝術史研究所碩士論文、2012年

陳其澎「“框架”臺灣：日治時期殖民現代性的研究」文化研究學會 2003 年年會·「靠文化·By Culture」學術研討會、2003年。

黃啟泰「昭和 10 年震災公館庄殉難者記念碑」和「詹德坤墓碑」～苗栗縣公館鄉大坑村拓碑後記』『國史館臺灣文獻館電子報』第 82 期、2011 年 7 月 15 日。

黃琦惠「再現與改造歷史－1935 年博覽會中的「台灣歷史畫」』『美術史研究集刊』第 20 期、2006 年。

蔡厚男「台灣都市公園的建制歷程（1895-1987）」台灣大學土木工程研究所博士論文、1990 年。

蔡錦堂「皇民化運動前臺灣社會教化運動的展開（1931-1937）」『臺灣史國際學術研討會，社會經濟與拓墾論文集』臺北：淡江大學歷史學系、1995 年。

顏娟英「戰後初期臺灣美術的反省與幻滅」『二二八事件研究論文集』吳三連文教基金、1998 年。

顏娟英「台灣早期西洋美術的發展 1-3」『藝術家』168, 169, 170、1989 年 5-7 月。

顏娟英「一九三〇年代美術與文學運動」台灣大學歷史系編『日據時期台灣史國際學術研討會論文集』台北市：國立台灣大學、1992 年。

顏娟英「日治時期地方色彩與台灣意識問題－林玉山從「水牛」到「家園」系列作品」『新史學』第 15：2、2004 年 6 月。

Joseph R. Allen 著／楊美櫻譯「台灣的神馬與意識形態」『台灣文學的東亞思考』行政院文化建設委員會、2007 年。

(3) 展覽會圖錄、資料集、写真集、辭典等

莊永明編撰『台灣鳥觀圖』台北市：遠流、1996 年。

顏娟英編著『臺灣近代美術大事年表』台北市：雄獅、1998 年。

顏娟英·鶴田武良譯著『風景心境—臺灣近代美術文獻導讀 上下』台北市：雄獅、2001 年。

林獻堂著、許雪姬等註解『灌園先生日記』台北市：中央研究院臺灣史研究所籌備處、2000-2013 年。

『消失中的軸線：國立臺灣博物館的百年滄桑與風華：1906-2005』台北市：國立臺灣博物館、2005 年。

何培齊文字編撰、國家圖書館閱覽組編『日治時期的臺北—映象臺灣系列 1』台北市：國家圖書館、2007 年。

何培齊文字編撰、國家圖書館閱覽組編『日治時期的臺南—映象臺灣系列 2』台北市：國家圖書館、2007 年。

何培齊文字編撰、國家圖書館閱覽組編『日治時期的臺中—映象臺灣系列 3』台北市：國家圖書館、2009 年。

葉柏強『顧我洄瀾：花蓮歷史影像集』花蓮市：花蓮縣文化局、2014 年。

『台湾製造・製造台湾』台北市：台北市立美術館、2016年。

『與植物園一起變更好！：臺北植物園 120 週年紀念文集』台北市：行政院農業委員會林業試驗所、2016年。

戴寶村撰文『日治時期臺北州立臺北第二中學校簡史』2012年。

B. 日本文献 (筆者アイウエオ順)

(1) 書籍

青井哲人『植民地神社と帝国日本』東京：吉川弘文館、2005年。

五十殿利治編『「帝国」と美術：一九三〇年代日本の対外美術戦略』東京：国書刊行会、2010年。

石井元章『明治期のイタリア留学—文化受容と語学習得—』東京：吉川弘文館、2017年。

井上章一『ノスタルジック・アイドル 二宮金次郎』東京：新宿書房、1989年。

岩井茂樹『日本人の肖像 二宮金次郎』東京：角川学芸出版、2010年。

岡田裕成『ラテンアメリカ 越境する美術』東京：筑摩書房、2014年。

尾崎真人監修『池袋モンパルナスの作家たち (彫刻編)』池袋モンパルナスの会、オクターブ、2007年。

小田原のどか編著『彫刻 SCULPTURE 1—空白の時代、戦時の彫刻／この国の彫刻のはじまりへ』東京：トポフィル、2018年。

五十殿利治監修・齊藤祐子編『美術批評家著作選集第13巻 近代日本彫刻と批評』ゆまに書房、2011年。

片倉佳史『台湾に生きている「日本」』東京：祥伝社、2009年。

金子治夫『日本の銅像』京都：淡交社、2012年。

金子展也『台湾旧神社故地への旅案内：台湾を護った神々』東京：神社新報社、2015年。

顔娟英著、塚本麿充訳「一九一〇年代、台湾の美術活動—植民地官方品味の変遷—」東京文化財研究所編『大正期美術展覧会の研究』東京：中央公論美術出版、2005年。

紀旭峰『大正期台湾人の「日本留学」研究』東京：龍溪書舎、2012年。

北澤憲昭「モニュメントの創出—彫刻の近代化と銅像」『日本美術全集』第22巻、東京：講談社、1992年。

北沢憲昭・佐藤道信・森仁史等編『美術の日本近現代史：制度・言説・造型』東京：東京美術、2014年。

北原恵編著『アジアの女性身体はいかに描かれたか：視覚表象と戦争の記憶』東京：青弓社、2013年。

北村西望『百歳のかたつむり』東京：日本経済新聞社、1983年。

金恵信『韓国近代美術研究：植民地期「朝鮮美術展覧会」にみる異文化支配と文化表象』東京：ブリュッケ、2005年。

木下直之「記念碑と建築家」鈴木博之他編『シリーズ 都市・建築・歴史 8 近代化の波及』

- 東京：東京大学出版会、2006年。
- 木下直之『美術という見世物—油絵茶屋の時代』ちくま学芸文庫、東京：筑摩書房、1999年。
- 木下直之『わたしの城下町—天守閣から見える戦後の日本』東京：筑摩書房、2007年。
- 木下直之『銅像時代—もうひとつの日本彫刻史』東京：岩波書店、2014年。
- 呉文星著、所澤潤監訳『台湾の社会的リーダー階層と日本統治』交流協会、2010年。
- 駒込武「異民族支配の〈教義〉—台湾漢民族の信仰と近代天皇制のあいだ—」『岩波講座 近代日本と植民地4 統合と支配の論理』東京：岩波書店、1993年。
- 駒込武『植民地帝国日本の文化統合』東京：岩波書店、1996年。
- 駒込武『世界史のなかの台湾植民地支配』東京：岩波書店、2015年。
- 呉密察ほか編『記憶する台湾—帝国との相克』東京：東京大学出版会、2005年。
- 小山騰『ケンブリッジ大学秘蔵明治古写真』東京：平凡社、2005年。
- 近藤正己『総力戦と台湾：日本植民地崩壊の研究』東京：刀水書房、1996年。
- 坂野徳隆『風刺漫画で読み解く 日本統治下の台湾』平凡社新書、東京：平凡社、2012年。
- 新海竹太郎、新海竹蔵撰『新海竹太郎伝』新海堯、1981年。
- 高村光雲『幕末維新懐古談』岩波文庫、東京：岩波書店、1995年。
- 胎中千鶴『植民地台湾を語るということ：八田與一の「物語」を読み解く』東京：風響社、2007年。
- 田中修二『近代日本最初の彫刻家』東京：吉川弘文館、1994年。
- 田中修二『彫刻家・新海竹太郎論』鶴岡：東北出版企画、2002年。
- 田中修二監修『シリーズ・近代日本のモニュメント1 銅像写真集 偉人の倂 図版篇／資料篇』東京：ゆまに書房、2009年。
- 田中修二編『近代日本彫刻集成 第1巻 幕末・明治編』東京：国書刊行会、2010年。
- 田中修二編『近代日本彫刻集成 第2巻 明治後期・大正編』東京：国書刊行会、2012年。
- 田中修二編『近代日本彫刻集成 第3巻 昭和前期編』東京：国書刊行会、2013年。
- 田中修二『近代日本彫刻史』東京：国書刊行会、2018年。
- 陳培豊『「同化」の同床異夢：日本統治下台湾の国語教育史再考』東京：三元社、2001年。
- 中島利郎・吉原丈司編『鷺巣敦哉著作集2』東京：緑陰書房、2000年。
- 中村傳三郎『明治の彫塑：「像ヲ作ル術」以後』東京：文彩社、1991年。
- 西澤泰彦『日本植民地建築論』名古屋：名古屋大学出版会、2008年。
- 沼崎一郎『人類学者、台湾映画を観る：魏徳聖三部作『海角七号』・『セデック・バレ』・『KANO』』東京：風響社、2019年。
- 羽賀祥二『史蹟論：19世紀日本の地域社会と歴史意識』名古屋：名古屋大学出版会、1998年。
- 籠谷次郎「死者たちの日清戦争」大谷正・原田敬一編『日清戦争の社会史』大阪：フォーラムA、1994年。
- 檜山幸夫「日清戦争と民衆」檜山幸夫編著『近代日本の形成と日清戦争—戦争の社会史』東

- 京：雄山閣出版、2001年。
- 平瀬礼太「戦争と美術コレクション—そこにあってはならないもの」木下直之編『講座日本美術史6 美術を支えるもの』東京：東京大学出版会、2005年。
- 平瀬礼太『銅像受難の近代』東京：吉川弘文館、2011年。
- フット、ケネス・E、和田光弘ほか訳『記念碑の語るアメリカ—暴力と追悼の風景』名古屋：名古屋大学出版会、2002年。
- 古川勝三『台湾を愛した日本人：土木技師八田與一の生涯』（改訂版）東京都：創風社、2009年。
- 松本誠一『佐賀偉人伝3 岡田三郎助』佐賀：佐賀県立佐賀城本丸歴史館、2011年。
- 三澤真美恵『「帝国」と「祖国」のはざま—植民地期台湾映画人の交渉と越境』東京：岩波書店、2010年。
- 村上政彦『「君が代少年」を探して：台湾人と日本語教育』平凡社新書、東京：平凡社、2002年。
- 毛利敏彦『台湾出兵：大日本帝国の開幕劇』中公新書、1996年。
- 谷ヶ城秀吉編『大路水野遵先生：水野遵』〈植民地帝国人物叢書〉台湾編4、東京：ゆまに書房、2008年。
- 谷ヶ城秀吉編『柳生頭取の片影：柳生一義』〈植民地帝国人物叢書〉台湾編5、東京：ゆまに書房、2008年。
- 谷ヶ城秀吉編『辜顕栄翁伝：辜顕栄』〈植民地帝国人物叢書〉台湾編6、東京：ゆまに書房、2008年。
- 谷ヶ城秀吉編集『顔雲年翁小伝』〈植民地帝国人物叢書〉台湾編7、東京：ゆまに書房、2008年。
- 谷ヶ城秀吉編『柳生一義：柳生一義』〈植民地帝国人物叢書〉台湾編15、東京：ゆまに書房、2009年。
- 谷ヶ城秀吉編『陳中和翁伝：陳中和』〈植民地帝国人物叢書〉台湾編18、東京：ゆまに書房、2009年。
- 谷ヶ城秀吉編『顔国年君小伝：顔国年』〈植民地帝国人物叢書〉台湾編19、東京：ゆまに書房、2009年。
- 山口輝臣『明治神宮の出現』東京：吉川弘文館、2005年。
- 遊佐徹『蠟人形・銅像・肖像画：近代中国人の身体と政治』東京：白帝社、2011年。
- 楊孟哲『日本統治時代の台湾美術教育：1895-1927』東京：同時代社、2006年。
- 吉田千鶴子『近代東アジア美術留学生の研究—東京美術学校留学生史料—』東京：ゆまに書房、2009年。
- 廖瑾瑗「台湾近代画壇の「ローカルカラー」—「台湾美術展覧会」東洋画部を中心に—」岩城見一編『芸術／葛藤の現場—近代日本芸術思想のコンテクスト』京都：晃洋書房、2002年
- 若尾祐司、羽賀祥二編『記憶の比較文化史—史誌・記念碑・郷土』名古屋：名古屋大学出版

会、2005年。

若林正丈『台湾抗日運動史〈増補版〉』東京：研文出版、2001年。

若林正丈『台湾：変容し躊躇するアイデンティティ』筑摩新書、東京：筑摩書房、2001年。

若林正丈『台湾の政治：中華民国台湾化の戦後史』東京：東京大学出版会、2008年。

(2) 論文等

石井元章ほか「長沼守敬に関する包括的研究」『大阪芸術大学藝術研究所 研究調査報告書』第17号、2018年。

伊勢弘志「国民統制政策における銅像と社会：校庭に「二宮金次郎像」が建つまで」『駿台史學』140号、2010年。

池田忍「「支那服の女」という誘惑：帝国主義とモダニズム」『歴史学研究』765号、2002年8月。

大隈為三「岡田三郎助」座右宝刊行 編『現代日本美術全集 第2』角川書店、1955年。

何義麟「台湾人の歴史意識—「御用紳士」辜顕栄と「抗日英雄」廖添丁」『アジア遊学』第48号、勉誠出版、2003年。

顔娟英「植民地時代の台湾における文化独自性の表現—黄土水の「水牛」から林玉山の「家園」シリーズまで」『台湾2002年東洋絵画史学会（日文報告書）』、2002年。

木下直之「秘史「銅像」に歴史あり」『文藝春秋』第88巻3号、2010年2月。

木下直之「台湾戦争図再々考」『近代画説』20号、2011年。

日下部龍太「台湾総督府版初等教育年間国語教科書の基礎的研究—「民族」の使い分けに着目して」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』18号2、2011年3月。

児島薫「画家たちの西洋体験とアジアへのまなざし」『豊田市美術館紀要』3号、2010年。

迫内祐司「戦時下における美術制作資材統制団体について」『近代画説』13号、2004年。

清水重敦「「官社へ銅石像設立之儀二付伺」考：京都の創建神社と明治前期のモニュメント概念」『近代画説』22号、2013年。

宋晓雯「台湾の近代公園に関する歴史的研究—台北市の事例を中心として—」神戸大学大学院工学研究科博士論文、2012年。

高山百合「岡田三郎助《水浴の前》：「理想画」における花の象徴性」『美術史』172号、2012年3月。

立花義彰「水彩画家 石川欽一郎」『静岡県博物館協会研究紀要』第10号、1987年3月。

立花義彰「石川欽一郎 人と作品（上）」『静岡県立美術館紀要』第7号、1989年3月。

立花義彰「石川欽一郎 人と作品（中）」『静岡県立美術館紀要』第11号、1994年3月。

田中修二等「特輯 明治の彫刻」『国華』第1426号、2014年8月。

田中修二「豪農と彫刻家：彫刻家大熊氏広と《林勇蔵像》」『成城美学美術史』4号、1997年。

千葉慶「現在、日本近代美術がどうアジアを描いてきたかを問うということ」『豊田市美術館紀要』3号、2010年。

豊島舜吉「思い出 台湾の二・三月ごろ」『自治大阪』第9巻第3号、大阪府地方自治振興会、1958年3月。

永田雄次郎「大熊氏廣「関西学院監督ランバス銅像」および「関西学院名誉院長吉岡美国銅像」について」『関西学院史紀要』11号、2005年3月。

中村義一「石川欽一郎と塩月桃甫：日本近代美術史における植民地美術の問題」『京都教育大学紀要A』76号、1990年3月。

西原大輔「近代日本絵画のアジア表象」『日本研究』(国際日本文化研究センター紀要)26集、2002年12月。

羽賀祥二「日清戦争記念碑考：愛知県を例として」『名古屋大学文学部研究論集 史学』44巻、1998年3月。

羽田ジェシカ「台湾近代美術におけるアイデンティティ—陳澄波の《清流》(1929)を中心に—」『九州中国学会報』第49巻、2011年。

檜山幸夫「帝国日本の戦歿者慰霊と靖国神社(上) 日本統治下台湾における台湾人の靖国合祀を事例として」『社会科学研究』第31巻第1号、2011年。

松本誠一「日本近代風景画—岡田三郎助の場合」『美術史』132号、1992年4月。

ラワンチャイクン寿子「台湾の女性「日本画家」—陳進筆《サンティモン社の女》をめぐって—」『美術史』165号、2008年10月。

李淑珠「台湾ローカルカラーの戦時動員について」『美術史』161号、2006年10月。

若林正丈「1923年東宮台湾行啓の〈状況的脈絡〉—天皇制の儀式戦略と日本植民地主義—」『教養学科紀要』(東京大学教養学部)、第16号、1984年3月。

(3) 展覧会図録、資料集、写真集、辞典、その他(発行年順)

岡田三郎助遺作展覧会委員会編纂『岡田三郎助作品図録』京都市：便利堂、1940年。

日展史編纂委員会編『日展史』東京：日展、1-15巻、1980-1985年。

東京都恩賜上野動物園編『上野動物園百年史 資料編』東京都生活文化局広報部都民資料室、1982年。

東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史 美術学部編』東京：ぎょうせい、1987-1997年。

萬鉄五郎記念館編『長沼守敬：近代彫塑の原点』萬鉄五郎記念館、1992年。

鳩ヶ谷市立郷土資料館編『大熊氏広・人と作品：特別展』鳩ヶ谷市立郷土資料館、1995年。

三重県立美術館ほか編『高村光雲とその時代展』三重県立美術館ほか、2002年。

国立歴史民俗博物館編『近現代の戦争に関する記念碑：「非文献資料の基礎的研究」報告書』国立歴史民俗博物館、2003年。

千葉瑞夫ほか編『長沼守敬とその時代展』長沼守敬とその時代展実行委員会、2006年。

『構造社展：昭和初期彫刻の鬼才たち』キュレイターズ、2005年。

東京国立近代美術館ほか企画・監修『日本彫刻の近代』京都：淡交社、2007年。

尾崎信一郎他編『日本近現代美術史事典』東京：東京書籍、2007年。

「日本近代と「南方」概念—造形にみる形成と展開」平成19年度-平成21年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究報告書、研究代表者：丹尾安典、2010年。

福岡アジア美術館ほか編『東京・ソウル・台北・長春—官展にみる近代美術』福岡アジア美術館ほか、2014年。

佐賀県立美術館編『岡田三郎助：エレガンス・オブ・ニッポン』佐賀県立美術館、2014年。

井原市立田中美術館、小平市平櫛田中彫刻美術館編『ジャパニーズ・ヴィーナス：彫刻家 藤井浩祐の世界』井原市立田中美術館、小平市平櫛田中彫刻美術館、2014年。

神奈川県立近代美術館ほか編『日韓近代美術家のまなざし—『朝鮮』で描く』神奈川県立近代美術館ほか、2015年。

府中市美術館編『麗しき故郷「台湾」に捧ぐ—立石鐵臣展』府中市美術館、2016年。

立花義彰「日本語版 増補新輯 台湾近代美術與日本之關聯年表（稿）」（私家版）、2017年4月1日版。

3. ウェブサイト、データベース

A. 中文（台湾・中国）

日治時期期刊影像系統（臺灣學研究中心）

<http://stfj.ntl.edu.tw/cgi-bin/g32/gweb.cgi/login?o=dwebmge&cache=1560694688797>

日治時期圖書影像系統（臺灣學研究中心）

<http://stfb.ntl.edu.tw/cgi-bin/g32/gweb.cgi/login?o=dwebmge&cache=1560694658857>

北投埔林炳炎 <https://pylin.kaishao.idv.tw/>

百年老校（國家教育研究院）http://school.naer.edu.tw/book.php?page_id=8

政大數位典藏「我樂多齋：鄭世璠文庫日治藝文期刊」

<https://contentdm.lib.nccu.edu.tw/digital/collection/sfcjournal>

校園生活記憶庫（國立臺灣歷史博物館）<https://school.nmth.gov.tw/index>

意象・台灣 <http://www.insighttaiwandb.com.tw/>

陳澄波文化基金會 <http://chenchengpo.dcam.wzu.edu.tw/>

國家文化資料庫 <http://newnrch.digital.ntu.edu.tw/nrch/>

蒲添生雕塑紀念館 <http://pu-hao-ming.xxking.com/pts.htm>

數位典藏與數位學習 <http://digitalarchives.tw/>

數位島嶼（中央研究院數位文化中心）<https://cyberisland.teldap.tw/graphyer>

臺灣人物誌（1895~1945）資料庫 <http://tbmc.ncl.edu.tw:8080/whos2app/start.htm>

臺灣史檔案資源系統（中央研究院臺灣史研究所）

<http://tais.ith.sinica.edu.tw/sinicafrsFront/index.jsp>

臺灣百年歷史地圖（中央研究院地理資訊科學研究專題中心）

<http://gissrv4.sinica.edu.tw/gis/twhgis/>

台湾美術展覧會資料庫

http://ndweb.iis.sinica.edu.tw/twart/System/database_TE/00te_index/te_index.htm

臺灣記憶（臺灣國家圖書館） http://memory.ncl.edu.tw/tm_cgi/hypage.cgi

台湾總督府檔案（中央研究院臺灣史研究所、國史館臺灣文獻館）

<http://sotokufu.sinica.edu.tw/>

臺灣總督府府官報資料庫（國史館臺灣文獻館）

<http://db2.lib.nccu.edu.tw/view/loginAction.php>

臺灣總督府職員錄系統（中央研究院臺灣史研究所）

<http://who.ith.sinica.edu.tw/mpView.action>

臺灣舊照片資料庫（國立臺灣大學圖書館）

<http://photo.lib.ntu.edu.tw/pic/db/oldphoto.jsp>

B. 日文（日本） アイウエオ順

金子展也「台湾に渡った日本の神々—今なお残る神社の遺構と遺物」

http://blog.goo.ne.jp/jinjya_taiwan

『建築雑誌』アーカイブス（一般社団法人日本建築学会）

<https://www.aij.or.jp/archive-search.html>

国立公文書館デジタルアーカイブ

<https://www.digital.archives.go.jp/>

国立国会図書館デジタルコレクション

<http://dl.ndl.go.jp/>

鈴木商店記念館「鈴木商店写真館」

<http://www.suzukishoten-museum.com/>

東京藝術大学大学美術館所蔵品データベース

<http://jmapps.ne.jp/geidai/>

東京文化財研究所データベース

「物故者記事データベース」「新海竹太郎関連ガラス乾板データベース」「黒田清輝日記」

<https://www.tobunken.go.jp/materials/>

名古屋大学医学部史料室「近代医学の黎明 デジタルアーカイブ」

<http://www.med.nagoya-u.ac.jp/medlib/history/index.html>

那覇市歴史博物館デジタルミュージアム「川平家資料」

<http://www.rekisho-archive.city.naha.okinawa.jp/archives/item4>

C. その他海外

East Asia Image Collection（Skillman Library, Lafayette College）

<http://dss.lafayette.edu/collections/east-asia-image-collection/>

tapics

<http://taipics.com/>

II. 作家別文献

A. 日本人彫刻家

【齋藤静美（1876-没年不明）】

1. 一次資料

(1) 新聞

・乃木将軍像

「中学校と乃木大將銅像」『台湾日日新報』1914年4月28日、第7面。

「乃木小型銅像」『台湾日日新報』1914年4月29日、第6面。

・藤根吉春銅像

「銅像模型竣成」『台湾日日新報』1914年12月21日、第5面。

「藤根氏の寿像 農事講習生の謝恩」『台湾日日新報』1916年3月7日、第7面。

「藤根氏之寿像 農事講習生之謝恩」『台湾日日新報』1916年3月8日、第6面。

「麗はしき旌彰 農事講習生之美挙 藤根吉春」『台湾日日新報』1916年8月17日、第7面。

「建像紀念 農事講習生之美挙」『台湾日日新報』1916年8月18日、第6面。

「藤根氏胸像装置十五日除幕式举行」『台湾日日新報』1916年9月2日、第7面。

「藤根立像」『台湾日日新報』1916年9月03日、第6面。

「胸像と除幕式 藤根技師」『台湾日日新報』1916年9月30日、第7面。

「胸像及除幕式」『台湾日日新報』1916年9月04日、第4面。

「藤根銅像除幕式」『台湾日日新報』1916年9月16日、第5面。

「藤根氏銅像除幕式」『台湾日日新報』1916年9月16日、第7面。

「藤根寿像除幕式」『台湾日日新報』1916年9月21日、第2面。

「寿像除幕式 藤根主事謝恩会」『台湾日日新報』1916年9月21日、第6面。

「藤根氏の寿像 謝恩の為に建設さる」『台湾日日新報』1916年9月21日、第7面。

「寿像竣功式と素木博士祝賀会 根前主事」『台湾日日新報』1919年1月12日、第7面。

「寿像竣功式先聲 藤根前主事」『台湾日日新報』1919年1月13日、第4面。

・アート・スミスメダル

「神の力 嗚呼たゞ感嘆あるのみ 神通の極寧平凡に近し」『台湾日日新報』1917年7月5日、第7面。

「ス氏に贈れる金製メダル 台北飛行後援会より」『台湾日日新報』1917年7月6日、第7面。

・台湾神社龍像／神馬像

- 「台湾神社の新噴水 齋藤静美氏の作」『台湾日日新報』1920年1月29日、第7面。
 「神馬献納奉告祭 請負業組合の解散記念」『台湾日日新報』1922年9月25日、第5面。
 「献神馬奉告祭」『台湾日日新報』1922年9月26日、第6面。

(2) 定期刊行物

「藤根吉春氏寿像除幕式」『台湾農事報』第120号、1916年11月20日。

(3) その他

「齋藤静美」(1917-)「大正六年元在官職者履歴書専売局」『台湾総督府専売局檔案』国史館台湾文献館、典藏番号：00112592007。

「奉納品報告(台湾神社)」(1922年9月01日)「大正十一年永久保存第十五卷」『台湾総督府檔案』国史館台湾文献館、典藏番号：00003278022。

2. 二次資料

(1) 書籍・図録等

田中修二監修『偉人の倂 図版篇／資料篇』東京：ゆまに書房、2009年。

【須田速人(晃山)(1888-1966)】

1. 一次資料

(1) 新聞

・展覧会／論評等

- 「蛇木」芸術会成る 第一回洋画彫刻展覧会」『台湾日日新報』1915年2月13日、第7面。
 「蛇木会展覧会」『台湾日日新報』1915年2月14日、第7面。
 「新刊紹介 蛇木(八月号)」『台湾日日新報』1915年8月25日、第3面。
 「雑誌「蛇木」」『台湾日日新報』1916年7月25日、第5面。
 「洋画展覧会」『台湾日日新報』1916年10月24日、第7面。
 「洋画展覧会」『台湾日日新報』1916年10月27日、第2面。
 「美術展覧会 婦人会事務所にて」『台湾日日新報』1916年10月28日、第7面。
 「美術展覧会」『台湾日日新報』1916年10月31日、第7面。
 「社会の色色 美術界」『台湾日日新報』1917年1月1日、第11面。
 「蛇木展覧会 台湾の誇りの気分」『台湾日日新報』1917年5月20日、第7面。
 「赤土洋画会展覧会」『台湾日日新報』1920年11月11日、第7面。
 「赤土洋画会 来る四日五日両日」『台湾日日新報』1920年12月3日、第7面。
 「赤土洋画会 思の外立派に」『台湾日日新報』1920年12月5日、第7面。
 「内地電報 帝展へ出品 須田速人君の労作」『台湾日日新報』1920年9月19日、第2面。
 須田速人「塩月桃甫君の芸術」『台湾日日新報』1923年6月30日、第7面。

・バルトン博士像

「バルトン博士銅像除幕式 来る三十日挙行」『台湾日日新報』1919年3月28日、第7面。

「博士銅像除幕式」『台湾日日新報』1919年3月29日、第6面。

「台湾で初めて鑄造した銅像 本日除幕式挙行の故バルトン氏の銅像」『台湾日日新報』1919年3月30日、第4面。

「水源地唧筒室とバルトン氏銅像」『台湾日日新報』1919年3月30日、第7面。

「台北水道の大恩人故バルトン氏 水源地に紀念銅像の建立」1『台湾日日新報』1919年3月30日、第7面。

「故麦魯東氏略歴 台北水道大恩人 水源地建立銅像」『台湾日日新報』1919年3月30日、第3面。

「故バルトン氏の銅像除幕式」『台湾日日新報』1919年3月31日、第5面。

「麦氏銅像除幕式」『台湾日日新報』1919年4月1日、第6面。

「写真は水源地本館前のバルトン像」『台湾日日新報』1930年3月30日、第2面。

・近藤久次郎銅像

「近藤氏の胸像建立基金募集中」『台湾日日新報』1925年11月14日、夕刊第2面。

「前測候所長近藤翁の 胸像が出来た」『台湾日日新報』1926年5月10日、第3面。

「贈られる胸像の除幕式を控へて 前台北測候所長の近藤久次郎翁危篤」『台湾日日新報』1926年7月24日、第5面。

「功勞卅年を祝はれる胸像も見ずして逝去した」『台湾日日新報』1926年08月16日、第2面。

「近藤氏胸像据附終る」『台湾日日新報』1926年10月7日、夕刊第2面。

「近藤氏胸像除幕式六日挙行」『台湾日日新報』1926年11月3日、夕刊第2面。

「三等郵便局長 會議終了 近藤前測候所長の胸像」『台湾日日新報』1926年11月7日、夕刊第1面。

「近藤久次郎氏の胸像除幕式」『台湾日日新報』1926年11月7日、夕刊第2面。

「三十年一日の如く 本島氣象事業に尽した近藤氏胸像の除幕式」『台湾日日新報』1926年11月7日、夕刊第2面。

・佐久間左馬太銅像

「故佐久間大將 胸像除幕式」『台湾日日新報』1927年08月20日、第5面。

「故佐久間大將胸像除幕式 四日挙行」『台湾日日新報』1927年8月3日、夕刊第4面。

「第十三回忌辰に於て故佐久間伯爵胸像除幕式を盛大に挙行」『台湾日日新報』1927年8月5日、夕刊第2面。

「佐久間故総督 了覚寺胸像除幕式 後藤長官等臨場」『台湾日日新報』1927年8月5日、第4面。

・船越倉吉銅像

「故船越倉吉氏の胸像除幕式」『台湾日日新報』1933年11月17日、夕刊第2面。

「故船越組長 胸像除幕式」『台湾日日新報』1933年11月18日、第8面。
「故船越他吉氏の胸像除幕式きのふ挙行」『台湾日日新報』1933年11月19日、第7面。
「故船越氏胸像除幕式」『台湾日日新報』1933年11月20日、第8面。

(2) 定期刊行物

「銅像を秋晴れにめぐり(4) 佐久間総督」『旅と運輸』28号、1938年12月17日。
「近藤久次郎翁胸像建設に就て」『台湾通信協会第』11号。
「前台北消防組長船越氏胸像除幕式挙行」『台衛新報』63号、1936年12月。

2. 二次資料

(1) 書籍・図録等

河北町誌編纂委員会編『河北町誌 下巻』河北町、1979年。
立花改進『わがふるさとの町飯野川』わがふるさとの町飯野川刊行後援会、1965年。

(2) 論文等

朱家瑩「臺灣日治時期的西式雕塑」臺灣大學藝術史研究所碩士論文、2009年。

【鮫島台器（盛清）（1898-没年不明）】

1. 一次資料

(1) 新聞

・『台湾日日新報』
「基隆／軌道に石 運転手鮫島某」『台湾日日新報』1924年3月4日、第3面。
「基隆垂細亜画会 力作七十点展覽」『台湾日日新報』1927年9月26日、第3面。
「基隆駅で苦力轆から右足切断遂に死亡」『台湾日日新報』1928年7月31日、夕刊第2面。
「七里氏塑像 除幕式 二十四日仙洞最勝寺に」『台湾日日新報』1928年8月20日、第5面。
「基隆の塑像展」『台湾日日新報』1929年4月25日、第7面。
「鮫島盛清氏彫刻個人展廿八日本社講堂で」『台湾日日新報』1929年7月26日、夕刊第2面。
「台湾出身の鮫島氏帝展に彫塑立像人選」『台湾日日新報』1932年10月23日、第4面。
「鮫島盛清氏帰台」『台湾日日新報』1932年11月13日、第7面。
「入選お礼に帰台した鮫島君語る」『台湾日日新報』1932年11月18日、第7面。
「鮫島盛清氏」『台湾日日新報』1933年4月7日、夕刊第4面。
「台湾が産んだ彫刻家の一人鮫島氏の彫刻展七、八、九の三日間教育会館で」『台湾日日新報』1933年4月7日、第7面。
「鮫島氏個展けふ開幕入場者多し」『台湾日日新報』1933年4月8日、夕刊第2面。
「けふの催し／鮫島盛清彫刻展」『台湾日日新報』1933年4月8日、第7面。

- 「けふの催し／鮫島盛清氏彫刻展」『台湾日日新報』1933年4月9日、第7面。
- 「鮫島氏彫塑展基隆で開催」『台湾日日新報』1933年4月14日、夕刊第2面。
- 「彫刻家鮫島盛清氏の後援会を組織」『台湾日日新報』1933年6月9日、第7面。
- 「鮫島盛清氏帝展に入選 山の男の彫刻で」『台湾日日新報』1933年10月10日、第7面。
- 「四尺の女神像を基隆公会堂に寄贈彫塑界の新人鮫島盛清君が」『台湾日日新報』1934年2月11日、夕刊第2面。
- 「台湾からの出品 鮫島氏の力作『解禁の朝』」『台湾日日新報』1934年10月7日、第7面。
- 「鮫島盛清氏作猪の彫刻本社で取次ぐ」『台湾日日新報』1934年12月19日、第7面。
- 「小楠公の彫刻を 皇太子様に献上 台湾出の鮫島台器氏が」『台湾日日新報』1934年12月29日、第7面。
- 「鮫島台器氏の彫刻個人展基隆と台北で」『台湾日日新報』1935年2月10日、第2面。
- 「鮫島台器氏の彫刻個人展 九日から本社講堂で」『台湾日日新報』1935年2月7日、第7面。
- 「けふの催し／鮫島氏彫刻展」『台湾日日新報』1935年2月9日、第7面。
- 「けふの催し／鮫島氏彫刻展」『台湾日日新報』1935年2月10日、第7面。
- 「鮫島台器氏彫刻展覧会」『台湾日日新報』1935年2月23日、第3面。
- 「彫塑個人展」『台湾日日新報』1935年3月7日、第3面。
- 「故北白川宮能久親王殿下の御尊像」『台湾日日新報』1935年6月17日、第2面。
- 「北白川宮殿下の御尊像を頒布」『台湾日日新報』1935年7月26日、第5面。
- 「秋の美術を拾つて（一）／北村氏と銅像」『台湾日日新報』1935年10月26日、第8面。
- 「鮫島台器氏の鼠の彫刻置物」『台湾日日新報』1935年12月20日、夕刊第2面。
- 「松本記念館の寿像到着」1936年9月1日、第9面。
- 「鮫島氏の作品入選」『台湾日日新報』1939年10月14日、夕刊第2面。
- 「誉れの漁船隊銅像にして永久に記念」『台湾日日新報』1940年6月5日、第7面。
- 「鮫島台器氏 群像を製作」『台湾日日新報』1940年9月26日、第4面。
- 「大同会から故三好翁に胸像を贈呈」『台湾日日新報』1941年4月3日、夕刊第2面。
- 「鮫島氏の精進結実」『台湾日日新報』1941年6月13日、夕刊第2面。
- 「写真は鮫島氏の作品」『台湾日日新報』1941年10月7日、夕刊第2面。

・その他の新聞

- 「隠れたる彫刻家 鮫島氏の個人展」『新高新報』、1933年3月31日、第9面。
- 「鮫島画伯は語る」『新高新報』、1934年11月23日、第7面。
- 「台湾が生んだ彫刻家 鮫島台器氏個展」『新高新報』1935年1月25日、第21面。
- 「彫刻御嘉納の光栄に浴した鮫島台器氏は語る」『新高新報』1935年2月1日、第6面。
- 「宙に迷うた高雄富豪 陳中和翁の胸像」『南日本新聞』1936年8月7日、第8面。
- 「除幕式と同時に応召 蓬萊米の恩人故末永氏の胸像」『朝日新聞 台湾版』1943年4月11

日、第1面。

(2) 定期刊行物

「鮫島盛清氏」『サウンド』第3号、1932年11月、23頁。

「鮫島盛清氏帝展に入選」『台湾教育』376号、1933年11月、134頁。

「鮫島台器氏 文展彫塑部無鑑査に」『南方美術』創刊号、南方書院、1941年8月、25頁。

(3) その他

『台湾総督府職員録』

「第七回 台陽展目録」(鄭世璠氏所蔵資料)

美術年鑑社編『現代美術家総覧 昭和19年』東京：美術年鑑社、1944年

2. 二次資料

(1) 書籍・図録等

顔娟英編著『台湾美術大事年表』台北市：雄獅美術、1998年。

「鮫島台器」『近代日本彫刻集成 第三卷』東京：国書刊行会、2013年、495頁。

作品図版《山の男》：郭鴻盛、張元鳳編『傳承之美 台灣50美術館藏品選萃』國立臺灣師範大學文物保存維護研究發展中心、2016年。

(2) 論文等

朱家瑩「臺灣日治時期的西式雕塑」臺灣大學藝術史研究所碩士論文、2009年。

【後藤泰彦（1902-1938）】

※『構造社展』（2005年）にも参考文献目録あり。一部、記事が確認出来ないもの、また筆者未見のものがあり、確認出来たもののみを掲載した。

1. 一次資料

(1) 新聞

・台湾で発行されたもの

松波治郎「構造社瞥見 さて更生振りは如何に？」『台湾日日新報』1933年9月25日、第5面

「堀内医専校長の塑像制作 構造社の後藤泰彦氏が来台」『台湾日日新報』1934年9月29日、第7面。

「張山鐘氏像」『台湾日日新報』1934年9月30日、第6面。

「堀内医専校長の胸像」『台湾日日新報』1934年10月9日、第7面。

「後藤泰彦氏作『林澄堂氏』の像」『台湾新聞』1935年4月9日、第7面。

- 「後藤泰彦氏きのふ来台」『台湾日日新報』1936年1月12日、第5面。
「堀内先生在職卅年 祝賀会胸像除幕式 千余人列席極一時盛典」『台湾日日新報』1936年3月23日、第8面。
「後藤泰彦氏 清凜」『台湾日日新報』1937年10月27日、第6面。

・日本で発行されたもの

- 「看守諸嬢に送られた後藤君」『読売新聞』1938年5月21日、夕刊第7面。
「“戦死は覚悟だ”構造社の後藤上等兵」『東京朝日新聞』1938年6月26日、第10面。
「構造社の同人 後藤（泰彦）伍長戦死」『東京朝日新聞』1938年8月7日、第7面。
徳富蘇峰「双宜荘偶言(14) 生死大事」『大阪毎日新聞』1938年8月13日、夕刊第1面。

(2) 定期刊行物

- 「堀内校長在職四十年祝賀の会」『台衛新報』1936年4月。
「後藤泰彦」(物故者記事)『日本美術年鑑』昭和14年版、110頁
作品図版《月潭所見》:『アサヒグラフ』618号、1935年9月11日、30頁。

2. 二次資料

(1) 書籍・図録等

- 頼志彰『台湾霧峰林家留真集』台北市:南天書局、1989年。(後藤泰彦の在台時の写真)
「後藤泰彦」『構造社展:昭和初期彫刻の鬼才たち』キュレーターズ、2005年、108-110頁。
尾崎真人監修『池袋モンパルナスの作家たち(彫刻編)』池袋モンパルナスの会、京都市:オクターブ、2007年、43頁。
作品図版《バークレー博士像》:『神學與教會』第六卷、第三・四期合刊、台南神学院、1967年3月、口絵写真。
作品図版:後藤泰彦《林烈堂像》ブロンズ、1934年。謝仁芳主筆『霧峰林家開拓史』台北縣永和市:林祖密將軍紀念協進會、2010年、179頁

(2) 論文等

- 朱家瑩「臺灣日治時期的西式雕塑」臺灣大學藝術史研究所碩士論文、2009年。

【浅岡重治(1906-?)】

1. 一次資料

(1) 新聞

- ・君が代少年像(詹徳坤像)
「美談の主の銅像を建設 寄附金を募る」『台湾日日新報』1935年12月10日、7面。
「学びの庭に立つ詹徳坤少年の銅像 震災記念日に除幕式挙行」『台湾日日新報』1936年4

月 11 日、第 9 面。

「完成した詹少年の銅像（震災記念日に除幕式挙行）」『台湾日日新報』1936 年 4 月 12 日、第 5 面。

「少年銅像 建苗栗公館公 訂記念日除幕」『台湾日日新報』1936 年 4 月 13 日、第 8 面。

「詹少年の銅像除幕式盛大に挙行 知事代理以下多数出席」『台湾日日新報』1936 年 4 月 25 日、第 2 面。

・その他

「浅岡重治（彫刻家）」『台湾日日新報』1935 年 8 月 18 日、夕刊第 3 面。

「浅岡重治氏作の胸像頒布会」『台湾日日新報』1935 年 9 月 17 日、第 5 面。

「台南／寿建胸像」『台湾日日新報』1936 年 3 月 3 日、第 8 面。

「前田中校長の胸像除幕式」『台湾日日新報』1936 年 3 月 16 日、第 5 面。

浅岡重治「天才ロダンの青春譜（上）」『台湾日日新報』1937 年 7 月 13 日、第 7 面。

浅岡重治「天才ロダンの青春譜（下）」『台湾日日新報』1937 年 7 月 14 日、第 7 面。

浅岡重治「彫刻家の眼に映る女性美（上）」『台湾日日新報』7 月 17 日、第 6 面。

浅岡重治「彫刻家の眼に映る女性美（下）」『台湾日日新報』7 月 20 日、第 6 面。

「美術連盟画展 十日から開催」『台湾日日新報』1936 年 4 月 9 日、第 7 面。

「台湾美術連盟展覧会開く」『台湾日日新報』1936 年 4 月 11 日、第 9 面。

(2) 定期刊行物

「美しき師弟の情」『まこと』1936 年 3 月 20 日、第 6 面。

浅岡重治「児童情操教育としての美術」『台湾教育』1936 年 4 月、23-28 頁。

浅岡重治「詹徳坤少年像に就いて」『台湾教育』1936 年 5 月。

「早川直義氏の胸像」『台湾婦人界』1937 年 3 月。

『早川直義翁寿像建設記』早川翁寿像建設委員会、1939 年

(3) その他

『震災美談 君が代少年』（出版地、出版年不明）

「昭和九年三月東京美術学校卒業見込者名簿」（東京芸術大学美術学部教育資料編纂室蔵）

『東京美術学校同窓会会員名簿』（東京美術学校）

2. 二次資料

(2) 論文等

朱家瑩「臺灣日治時期的西式雕塑」臺灣大學藝術史研究所碩士論文、2009 年。

【横田七郎（1906-2000）】（※主に台湾での活動に関するもの）

1. 一次資料

(1) 新聞

「院展に初入選 一家は台湾に 横田氏の喜び」新聞名日付不明、1929年9月。『近代美術関係記事資料集成』ゆまに書房、1991年

「本島出身の青年彫刻家又もや院展に見事入選」『台湾日日新報』1931年9月2日、第7面。

「台湾が生んだ青年木彫家横田七郎氏の個展」『台湾日日新報』1932年8月4日、夕刊第2面。

塩月善吉（桃甫）「台湾が生める木彫家 横田七郎君を語る」『台湾日日新報』1932年8月7日、夕刊第3面。

「横田七郎君 院展に入選」『台湾日日新報』1932年9月3日、夕刊第2面。

「明朗の秋映える！台展初入選の喜び」『台湾日日新報』1936年10月19日、第5面。（※兄・横田太郎台展入選記事）

(2) 定期刊行物

「横田七郎木彫展」『台湾美術』第3号、1944年5月、17頁。

2. 二次資料

(1) 書籍・図録等

『横田七郎展』平塚市美術館、2003年。

「横田七郎」『日本近代彫刻集成 第3巻』東京：国書刊行会、2013年、572-573頁。

(2) 論文・定期刊行物

「三、横田七郎氏に聞く（1991年11月10日）」「四、横田七郎氏に聞く（1995年2月17日）」「佐藤朝山について」『礪山美術館報』16号、1995年9月15日、31-43頁。

朱家瑩「臺灣日治時期的西式雕塑」臺灣大學藝術史研究所碩士論文、2009年。

B. 台湾人作家（一次資料は主に1945年以前のもの）

【黄土水（1895-1930）】

1. 一次資料

(1) 新聞

・『台湾日日新報』（発行年月日順）

「留學美術好成績」1915年12月25日、第6面

「臺灣學生與文展 黄土水氏出賽二點 後雖落選亦算爲榮」1919年10月21日、第5面

「黃君土水稻江人青年」（*写真：大理石像《秋妃》）1919年10月25日、第5面

「田総督 高砂寮学生と懇談せらる」1920年4月1日、第3面

「春雨霞む植物園に長官の台湾学生招待」1920年4月6日、第7面（「学生側を代表して美術学校卒業生黄土水は...」）

- 「無絃琴」1920年10月14日、第2面（*「今回帝展に『蕃童』を出品して入選の光栄を得た本島人の彫刻家黄土水君は...」）
- 「彫刻「蕃童」が帝展入選する迄黄土水君の奮闘と其苦心談（上）」1920年10月17日、第7面
- 「帝展入選之黄土水君（上）」1920年10月18日、第4面
- 「彫刻「蕃童」が帝展入選する迄黄土水君の奮闘と其苦心談（下）」1920年10月19日、第7面
- 「無絃琴」1920年10月23日、第2面
- 「黄土水祝賀会」1920年10月26日、第2面
- 「黄土水祝賀会」1920年10月27日、第5面
- 「第七回武徳際及全島演武大会 総裁宮殿下御台臨」1920年10月30日、第7面（*大稲埕公学校にて黄土水の『少女半身像』を見学）
- 「懐人 黄土水君」1921年1月1日、第45面
- 「帝展入選之彫刻 本島彫刻家 黄土水作」（*写真：《甘露水》）1921年10月27日、第5面
- 1922年3月12日、第7面 「初日の平和博」（*「黄土水の製作に係る大理石に彫刻した裸体の婦人像がある...」）
- 「平和博之初日」1922年3月13日、第3面
- 「黄土水氏入選」1922年10月11日、第5面
- 「黄土水氏 帝展入選」1922年10月11日、第7面
- 「台湾を去って一年目絵を習ひ始めて四年目」1922年10月20日、第7面
- 「黄土水氏の名誉 御下命により桜木を以て帝雉と華鹿を謹刻」1922年11月1日、第5面
- 「本島人彫刻家名誉」1922年11月2日、第6面
- 「黄土水氏が畏くも御下命により謹製上納したる木彫「雉」及「水鹿」」1922年12月3日、第7面（*写真：《雉》《鹿》）
- 「皇太子殿下行啓彙報 黄土水氏から彫刻童子献上」1923年4月1日、第7面
- 「將雕刻童子献上」1923年4月2日、第4面
- 「黄土水氏帰台」1923年4月25日、第6面
- 「黄氏作品展観」1923年4月25日、第7面
- 「天才彫塑家黄土水氏に畏くも単独拝謁を給ふた」1923年4月29日、第2面
- 「賜黄氏単独拝謁」1923年4月30日、第4面
- 「国師祝賀会盛況」1923年5月7日、第5面
- 「黄土水氏一席談」1923年5月9日、第6面
- 「詩壇 黄土水君兩次過訪有喜賦贈」1923年5月14日、第4面
- 「台湾の芸術は支那文化の延長と模倣と痛嘆する黄土水氏 帝展への出品「水牛」を製作中」1923年7月17日、第7面
- 「無絃琴」1923年8月10日、第2面（*「黄土水君が今秋の帝展に水牛を出品すべく...」）

- 「今秋の帝展出品の 水牛を製作しつゝある 本島彫塑界の偉才黄土水氏」1923年8月27日、第5面 (*写真:《水牛と子供》)
- 「公益会之努力」1923年9月21日、第6面
- 「東京より (二) 黄土水氏の芸術桜の精」1924年6月3日、第1面
- 「製作を励む黄土水氏 家兄の葬儀後上京」1924年7月11日、第2面
- 「難かしい動物の彫刻に今年も精を出してみる 本島出身の黄土君」1924年8月16日、第5面 (*写真:「アトリエに於ける水牛と黄土水氏」《郊外》)
- 「帝展彫刻入選発表 黄土水君入選」1924年10月11日、第2面
- 「帝展彫刻入選」1924年10月11日、第4面
- 「帝展に入選した黄土水氏の彫刻出品」1924年10月23日、第7面 (*写真:《郊外》)
- 「無腔笛」1926年4月7日、第4面 (*「最近黄土水君...」)
- 「北部有志者囑本島人惟一彫刻家黄土水氏彫釈迦仏像將献納於台北市内万華龍山寺是蓋黃氏自東京所寄到之撮影者」1926年7月23日、夕刊第4面 (*写真:《釈迦如来》)
- 「墨瀋余潤」1926年8月13日、第4面 (*「台湾彫刻家黄土水君。自東京来信言...」)
- 「来春の卯年に因み黄土水氏が力作した青銅製の兎」1926年10月15日、第2面 (*写真:《兎》)
- 「彫製青銅之兎 為紹介天才美術家」1926年10月15日、第4面
- 「黄土水氏 青銅兎受歡迎」1926年10月21日、夕刊第4面
- 「黄土水氏彫刻 龍山寺釈尊仏像 由黃氏親自携歸矣 附苦心研究談」1926年12月12日、第4面
- 「無腔笛」1926年12月15日、第4面 (*「最近歸自東京旋即於去十一日歸去之黄土水君...」)
- 「無腔笛」1927年3月19日、夕刊第4面 (*「彫刻家黄土水君最近来信...」)
- 「無腔笛」1927年6月9日、第4面 (*「按本島人之入選帝展。以彫刻部之黄土水君...」)
- 「無腔笛」1927年6月17日、第4面 (*「東京黄土水君来信。言方製作冊本農相肖像...」)
- 「基隆垂細亜画会 力作七十点展覽」1927年9月26日、第3面
- 「黄土水氏 出品参考品」1927年10月14日、夕刊第4面
- 「黄土水氏 作品個人展 博物館に開催」「黄土水君力作の置物」1927年10月19日、第2面 (*写真:《龍》)
- 「山本農相胸像 (彫刻者黄土水君)」1927年10月20日、第4面 (*写真:《山本農相胸像》)
- 「無腔笛」1927年10月20日、夕刊第4面 (漢文) (*「吾台唯一彫刻家黄土水君。...」)
- 「無腔笛」1927年10月26日、第4面 (漢文) (*「台湾人藝術家。彫刻部之黄土水君...」)
- 「黄土水君の個人展」1927年10月26日、第5面
- 「人事欄」1927年11月1日、第4面 (漢文) (*顔国年評議員祝賀会出席)
- 「黄土水氏個人展」1927年11月5日、第5面
- 「黃君彫刻品 陳列公開 一般好評」1927年11月6日、第4面 (漢文)

- 「黄土水氏個人展 力作が多い」1927年11月7日、第2面
- 「黄土水氏個人展 観者擁擠嘖嘖歎賞 五六両日在博物館」1927年11月7日、第4面（漢文）
- 「萬華龍山寺釈尊献納」1927年11月22日、第4面（漢文）
- 「萬華龍山寺釈尊仏像 寄附者補誌」1927年11月23日、第4面（漢文）
- 「黄土水氏 於基隆公開」1927年11月25日、夕刊第4面（漢文）
- 「黃氏個人展観覧者多」1927年11月30日、第4面（漢文）
- 「本島人彫刻家黄土水氏訂明六日赴内地」1927年12月5日、第4面（漢文）
- 「黄土水氏 六日の船にて九州へ」1927年12月7日、夕刊第1面
- 「久邇宮同妃両殿下の御尊像の作成を命ぜられた黄土水氏目下熱海で製作中」1928年1月26日、第2面
- 「久邇宮同妃両殿下命製造御尊像 黄土水氏光荣」1928年1月26日、第4面（漢文）
- 「久邇宮両殿下恩命 黄土水氏感激談」1928年2月2日、第4面（漢文）
- 「奉伺殿下御機嫌 献上銅製双槳船 黄土水氏光荣」1928年5月17日、第4面（漢文）
- 「彫刻家黄土水氏。本二十日赴内地予定二星期後帰台」1928年8月20日、夕刊第4面
- 「台北州献上品 招集常置員 水牛像決定」1928年9月5日、第4面（漢文）
- 「台湾が生んだ唯一の彫刻家光荣の黄土水君 久邇宮、同妃両殿下の御尊像を見事に完成」1928年9月30日、第7面
- 「台北州御大典献上品 黄土水氏彫刻中之（水牛原型）」1928年10月23日、第4面（*写真：《帰途》）
- 「黄土水氏作の新年床飾り」1928年12月23日、第2面（*写真：《琵琶》）
- 「久邇宮邦彦王殿下百日祭 故宮の特別なる御愛撫に感激 生命を御像完成に打込む 作者彫刻家黄土水君の話」1929年5月8日、夕刊第2面
- 「黄土水氏 帰自東京」1929年5月12日、夕刊第4面（漢文）
- 「無腔笛」1929年5月13日、第4面（*「黄土水君...電力会社長高木老博士寿像」）
- 「クチナシ」1929年5月14日、第2面（*黄土水・高木博士像）
- 「高木友枝氏の塑像完成」1929年6月4日、夕刊第2面（*写真《高木博士像》）
- 「総督寿像 黄土水氏趕刻 至九日完竣」1929年7月12日、第4面（漢文）
- 「出来上った川村総督の胸像 本島唯一の天才彫刻家黄土水氏作」1929年7月13日、夕刊第2面（*写真《川村総督像》）
- 「黄土水氏（彫刻家） 三十日出帆の朝日丸で帰京」1929年8月31日、第2面
- 「人事」1929年8月31日、夕刊第4面（漢文）（*黄土水上京）
- 「郭春秧翁の像を天才彫刻家が製作 本島が生んだ黄土水氏 本店、支店三ヶ所に輸送」1930年4月13日、夕刊第1面（*写真《郭春秧像》）
- 「黄土水氏 三日入港の朝日丸で帰台」1930年6月4日、第2面
- 「黄土水氏 二十八日基隆発扶桑丸にて帰京」1930年6月29日、夕刊第1面

- 「無腔笛」1930年12月1日、第4面（漢文）（*帝展出品、安部幸兵衛像）
- 「本島の彫刻家黄土水君逝く 盲腸炎に腹膜炎を併発し二十日東京で」1930年12月22日、第7面（*写真・黄土水）
- 「彫刻家黄土水氏 不幸病盲腸炎去世」1930年12月22日、第8面（漢文）
- 「故黄土水君の告別式」1930年12月23日、第7面
- 「本島惟一彫刻家黄土水氏。去二十日。客氏東京…」1930年12月24日、夕刊第4面（漢文）
- 「既報台湾惟一彫刻家黄土水氏…」1930年12月27日、夕刊第4面（漢文）
- 「故黄土水氏の頒布会 本年の干支に因んだ綿羊と山羊を」1931年2月3日、第7面（*写真《綿羊》《山羊》）
- 「黄土水絶作頒布会」1931年2月5日、第4面（漢文）
- 「台湾惟一彫刻家故黄土水氏夫人」1931年2月17日、夕刊第4面
- 「黄土水氏彫刻品 期使生命永留台湾 志保田校長及諸同志計画 欲仰各界人士援助」1931年2月28日、夕刊第4面（漢文）
- 「人事」1931年4月3日、夕刊第4面（*「故彫刻家黄土水氏之夫人秋桂女士…」）
- 「黄土水氏追悼会 廿一日在曹洞宗」1931年4月19日、第7面
- 「故黄土水氏の追悼会 二十一日催す」1931年4月19日、第8面（漢文）
- 「クチナシ」1931年4月22日、第2面
- 「故黄土水氏の追悼会執行 廿一日曹洞宗別院で」1931年4月22日、第7面（*写真「故黄土水氏の追悼会（二十一日曹洞宗別院で執行）」）
- 「黄土水氏追悼会 在曹洞宗別院式後追懷生平」1931年4月22日、第4面（漢文）
- 「故黄土水氏の遺作展覧会 九、十の両日間 栄町旧庁舎で」1931年5月6日、第7面（*写真「水牛の群像浮彫」と故黄土水氏）
- 「故彫刻家黄土水氏遺作品展覧会 九十両日間在旧総督府衙」1931年5月7日、夕刊第4面（漢文）
- 「故黄土水氏遺作展を観る」1931年5月8日、第7面（*写真「遺作「蕃童」の前に立つ秋桂未亡人」）
- 「招待日の故黄氏遺作展」「黄土水絶作頒布会組織」1931年5月9日、第7面
- 「黄土水君遺作展 木下長官も来観」1931年5月11日、第7面
- 「会事 故黄土水氏納骨式」1931年9月10日、第4面（漢文）
- 「志保田氏寿像建設及募集記念品贈呈」1931年9月10日、第8面（漢文）
- 「故黄土水氏の納骨式 十一日執行」1931年9月11日、第7面
- 「故黄土水氏 納骨式続報 在三橋町墓地」1931年9月12日、第7面
- 「故黄土水氏の一周年忌 十一日三橋町墓地で」1931年9月12日、第8面（*写真：一周年忌の一部）
- 「志保田銕吉氏記念品募集」1931年10月23日、第2面

- 「志保田氏寿像三十日在一師挙除幕式」1932年10月30日、夕刊第4面（漢文）
- 「志保田氏 寿像除幕式」1932年10月31日、第7面
- 「志保田氏 寿像除幕式」1932年10月31日、第8面（漢文）（*写真《志保田校長像》）
- 「黄土水氏の遺作“南国” 台北市公会堂に寄附」1936年12月29日、第7面（*写真《南国》）
- 「故黄土水氏 南国傑作 寄附公会堂」1936年12月30日、第4面（漢文）
- 「遺作寄附の奉告祭 黄廖氏秋桂未亡人が」1937年2月2日、第7面
- 「黄氏牛像 飾于公会堂 六日挙報告祭」1937年2月2日、第8面（漢文）
- 「黄土水氏の墓前で“水牛群像” 寄贈奉告祭」1937年2月7日、第7面（*写真：奉告祭）
- 「黄土水氏 墓前奉告祭」1937年2月7日、第8面
- 「第四回台陽展」1938年4月20日、第2面（*遺作展示）
- 「けふから台陽展開く」1938年4月29日、第7面（*遺作展示）
- ・『台湾日日新報』以外の新聞（発行年月日順）
- 「大作が殺到した 帝展昨日の搬入」『東京日日新聞』1919年10月6日、第7面。（*黄土水作品搬入記事）
- 「帝展 締切延期したが昨日殆ど搬入済み」『東京日日新聞』1920年10月6日、第7面。（*黄土水作品搬入記事）
- 「彫刻入選決定」『東京日日新聞』1920年10月10日、第7面。（*黄土水初入選記事）
- 「帝展の入選 彫刻 昨夕発表」『読売新聞』1920年10月10日、第5面。（*黄土水初入選記事）
- 「二つの展観 東京木芽会の木彫」『東京朝日新聞』1921年5月21日、第6面。
- 「東京通信 日本美術之観察（三）」『申報』1921年11月1日、第8版、第17492期
（*「有台湾人黄土水作大理右雕刻“甘露水”一座...」）
- 「本島人帝展入選」『台南新報』1922年10月11日、第7面。
- 「本島出身の黄土水氏作」『台南新報』1922年11月17日、第7面。
- “To Present Regent with Statues”, *The Japan Times* (Evening Edition) , 1923年3月22日。
- 「青鉛筆」『東京朝日新聞』1923年8月29日、第5面。（*黄土水水牛像）
- 「きょう一日帝展搬入の盛況」『読売新聞』1924年10月5日、第3面。（*黄土水《郊外》搬入記事）
- 「新進作家多し 本年の帝展彫刻部」『台南新報』1924年10月11日、第7面。
- 「色黒は嫌い」と白化した栖鳳氏 社中から贈る謝恩の胸像に大理石のおこのみ」『読売新聞』1927年5月31日、第7面。
- 「余禄」『台湾民報』1927年11月20日、第9面（*「前有教育会館美術展及黄土水氏個人彫刻展...」）
- 「台湾から献上」『東京朝日新聞』1928年10月31日、第7面。（*写真：《帰途》）

「貴き御胸像を前にして涙する台湾の彫刻家」『東京日日新聞』1929年5月7日、第7面。
 「死亡広告（黄土水）」『東京朝日新聞』1930年12月22日、第5面。
 「故彫刻家黃氏遺作品展覧」『台湾新民報』1931年4月18日、第8面。
 「故黄土水氏開追悼会」『台湾新民報』1931年4月25日、第4面。
 「黃氏遺作展覧開於旧庁舎」『台湾新民報』1931年5月16日、第8面。
 「國父銅像 故名彫刻家黄土水作品夫人捐贈市府」『民報』1946年9月20日、第3面。

(2) 定期刊行物（発行年順）

「表彰を受けたる人々黄土水君と謝文達君」（口絵）、「本島出身の新進美術家と青年飛行家黄土水」『台湾教育会雑誌』223号、1920年12月。

『美術写真画報』1巻10号、東京：博文館、1920年11月。（*写真：《蕃童》）

「黄土水作品の写真」『台湾青年』第1巻第5号、1920年12月、口絵。（*写真：《蕃童》）

「黄土水君の帝展入選」『台湾』（『台湾青年』後継雑誌）1922年11月、69頁。（*写真：《ポーズせる女》）

黄土水「台湾に生れて」『東洋』第25年第2・3号、1922年3月。

黄土水《思い出の女》、平和記念東京博覧会台湾館出品作品写真、『東洋』第25年第5号、1922年5月。

「皇室献上品」（口絵）、「黄土水君の名誉の作品 皇室に献上せし帝雉子と花鹿」（243頁）『台湾時報』1923年1月。

「台湾が生んだ唯一の彫刻家 光栄の黄土水君」『まこと』第81号、1928年11月、4頁。

「黄土水君を偲ぶ」『台湾教育』1931年6月、114-115頁。

「黄土水」林進発『台湾人物評』台北市：赤陽社、1929年、134-135頁。

「台湾唯一の彫刻家」劉克明『台湾今古談』台北市：新高堂、1930年、150-151頁および口絵写真。

「黄土水遺作展」『台日グラフ』第2巻第6号、1931年6月15日、4頁。

「黄土水」『画生活隨筆』東京：アトリエ社、1930年、271頁。

(3) その他関連資料（発行年順）

・黄土水に言及したもの、作品批評、写真掲載等

朝倉文夫「帝展の彫刻4」『読売新聞』1920年10月27日、第3面。（*黄土水《蕃童》批評）

畑耕一「帝展彫刻（中）」『東京日日新聞』1920年11月3日、第5面。（*黄土水《蕃童》批評）

中原悌二郎「帝展彫刻短評」『中央美術』1920年11月号（*黄土水《蕃童》批評）

『田健治郎日記』1921年1月18日（*後藤朝太郎来訪、黄土水の後援を頼まれる）

『田健治郎日記』1921年2月11日（*黄土水来訪、大理石彫刻を寄贈）

『田健治郎日記』1921年3月7日（*不在中黄土水来訪、彫刻の木台を持参）

- 『田健治郎日記』 1922年10月31日（*賀来佐賀太郎、黄土水の作品を宮中に献上との電報）
- 藤井浩祐「帝展美術評」『中央美術』1921年11月号、99頁。（*黄土水《甘露水》批評）
- 延陵生「平和博見物日記の一節」『台湾』第3年第1号、1922年4月。
- 斎藤素巖「平和博の彫刻を表す（下）」『読売新聞』1922年3月28日、第7面。
- 『平和記念東京博覧会出品写真帖』東京：赤誠堂出版部、1922年。
- 後藤朝太郎「台湾の美点を内地に宣伝するには」『台湾日日新報』1922年7月20日、第4面。
- 大隅為三「彫刻部の作品」『太陽』1922年11月、132頁。（*黄土水《ポーズせる女》批評）
- 斎藤素巖「帝展彫刻大甘評」『読売新聞』1924年10月21日、第4面。（*黄土水《郊外》批評）
- 木村五郎「帝展の彫刻寸評」『アトリエ』第9号、1924年10月、39頁。（*黄土水《郊外》批評）
- 下村宏『新聞に入りて』日本評論社、1925年、117-118頁。
- 「台展以外の美術分野」『芸天』、1929年3月号。
- 「台湾の美術」『芸天』（初夏号）、1929年5月号。
- 『古今美術家名鑑：現代画家番附 昭和5年版』真美術社、1930年、112頁。
- 張星建「台湾に於ける美術団体とその中堅作家（二）」『台湾文藝』第2号第10巻（10月号）、1935年9月。
- 「第四回 台陽美術協会展覧会目録」（陳澄波所蔵資料、中央研究院台湾史研究所）
- 臺北艋舺龍山寺全志編纂委員會編輯『艋舺龍山寺全志』臺北市：臺北艋舺龍山寺全志編纂委員會、1951年。（写真：《釋迦出山》木彫像）
- 顏水龍「回憶黄土水」、顏水龍畫作與文書（識別號：GAN_01_03_069）、中央研究院臺灣史研究所所蔵、年代不明。

・ 廖秋桂（黄土水夫人）関係

- 「新女講演会」『台湾日日新報』1926年7月21日、第4面。（*講演者の一人が廖秋桂）
- 「婦女問題大講演 在新竹公会堂」1926年8月1日、第9面。（*婦女問題講演会の講演者のひとりとして、7月18日新竹公会堂にて「日台婦女地位的差別」の講演を行う。）
- 「通霄大甲的婦女講演」『台湾民報』1926年8月8日、第8面。（*婦女問題講演会の講演者のひとりとして、7月24日通霄にて「三年間的感想」、25日大甲にて「台湾婦女的風俗」の講演を行う。）
- 廖秋桂「東京の婦人と台湾の婦人」『台湾日日新報』1931年7月14日、第6面。
- 廖秋桂「本島人の女性間に流行し出した洋装」『台湾日日新報』1931年7月31日、第8面。
- 廖秋桂「衣裳文化と『黒猫』 本島人モガの生活を解剖」『台湾日日新報』1931年10月2日、第6面。

「エスペラントの夕べ 台湾エスペラント会員」『台湾日日新報』1932年12月3日、第4面。

(*「エスペラント・ドラマ」の配役に廖秋桂の名がある)

廖秋桂「奇習と伝説に満ちた本島人の正月行事」『台日グラフ』第3巻第1号、1932年1月5日、23頁。

2. 二次資料（出版年順）

(1) 書籍・図録等

王白淵『臺灣省通志稿 卷六學藝志藝術篇』臺北市：臺灣省文獻委員會、1958年。

謝里法『台湾出土人物誌』臺北市：前衛、1988年。

『黄土水雕塑展』臺北市：国立歴史博物館、1989年。

『台湾近代雕塑発展：館蔵雕塑展』高雄市立美術館、1994年。

『黄土水百年誕辰紀念特展』高雄市立美術館、1995年。

王秀雄『臺灣美術全集 19 黄土水』臺北市：藝術家出版、1996年。

李欽賢『大地・牧歌・黄土水』臺北市：雄獅図書、1996年。

李欽賢『黄土水傳』南投市：臺灣省文獻會、1996年。

顏娟英「徘徊在現代藝術與民族意識之間—臺灣近代美術史先驅黄土水」『台湾近代美術大事年表』臺北市：雄獅図書、1998年。

謝里法『日抛時代台湾美術運動史（第5版）』臺北市：藝術家出版、1998年。

黄土水《水牛群像》：『どうぶつ美術園—描かれ、刻まれた動物たち』東京：三の丸尚蔵館展覧会図録 No.30、2003年。

尾崎真人監修『池袋モンパルナスの作家たち（彫刻編）』京都市：オクターブ、2007年。

吉田千鶴子『近代東アジア美術留学生の研究—東京美術学校留学生史料—』東京：ゆまに書房、2009年。

児島薫「近代化のための女性表象—「モデル」としての身体」北原恵編著『アジアの女性身体はいかに描かれたか』東京：青弓社、2013年。

福岡アジア美術館ほか『東京・ソウル・台北・長春—官展にみる近代美術』福岡アジア美術館ほか、2014年。

『台湾製造・製造台湾』台北市立美術館、2016年。

『台湾の近代美術—留学生たちの青春群像（1895-1945）』印象社印象社（制作）、2016年。

(2) 論文・定期刊行物

連曉青（廖漢臣）「天才彫刻家黄土水」『臺北文物』第1巻第1期、1952年12月。

王白淵「臺灣美術運動史」『臺北文物』第3巻第4期、1955年3月。

尺寸園（魏清徳）「龍山寺釋迦佛像和黄土水」『臺北文物』第8巻第4期、1960年2月。

「天才彫刻家—黄土水」『百代美育』15号、1974年11月。

李梅樹「談臺灣美術界之演變」『中國美術學報』1978年3月。

「黄土水專輯」『雄獅美術』第98期、1979年4月。

李梅樹主講「第 11 次「台灣研究研討會」紀錄：台灣美術的演變」『臺灣風物』第 31 卷第 4 期、1981 年 12 月。

陳昭明「從「蕃童」的製作到入選「帝展」—黃土水的奮鬥與其創作」『藝術家』220 期、1993 年 9 月。

江燦騰「日據時期台灣知識份子的自覺佛教藝術的創新—黃土水創作新佛像的時代背景及其今日台灣佛教藝術的典範作用（一）」『獅子吼』33-3、1994 年 3 月。

江燦騰「日據時期台灣知識份子的自覺佛教藝術的創新—黃土水創作新佛像的時代背景及其今日台灣佛教藝術的典範作用（二）」『獅子吼』33-4、1994 年 4 月。

陳昭明「黃土水的高砂寮歲月」『臺灣文藝』144 期、1994 年 8 月。

顏娟英“Between Modern Art and Ethnic Consciousness: Huang T'u-Shui, the Forerunner of Modern Taiwan Art”, *The Chinese Pen*, 26:3=105, 1998。

顏娟英「植民地時代の台湾における文化独自性の表現—黃土水の「水牛」から林玉山の「家園」シリーズまで」『台湾 2002 年東洋絵画史学会（日文報告書）』2002 年。

顏娟英「日治時期地方色彩與臺灣意識問題—林玉山從「水牛」到「家園」系列作品」『新史學』15 卷 2 期、2004 年 6 月。

邱函妮「近代台湾美術における近代台湾美術における「故郷」—黃土水と陳澄波の作品を中心に」鹿島美術財団調査研究報告論文、2009 年。

(3) 學位論文

呂莉薇「烈日之下的黃土水—雕塑作品的內涵與時代意義」國立彰化師範大學藝術教育研究所碩士論文、2003 年。

江美玲「黃土水作品的社會性探釋—以〈釋迦像〉〈水牛群像〉為例」東海大學美術史與美術行政組碩士論文、2005 年。

朱家瑩「台湾日治時期的西式雕塑」台灣大學藝術史研究所碩士論文、2009 年。

張育華「黃土水藝術成就之養成與社會支援網絡研究」國立臺灣師範大學歷史學系碩士論文、2016 年。

邱函妮「「故郷」の表象：日本統治期における台湾美術の研究」東京大学大学院人文社会系研究科博士学位論文、2016 年。

施翔齡「黃土水〈釋迦出山〉雕塑圖像研究」佛光大學佛教學系碩士論文、2016 年。

【蒲添生 (1912-1996)】

1. 一次資料 (1945 年以前のもの)

(1) 新聞

「海民（奉祝展）」『台湾日日新報』1940 年 10 月 10 日、第 4 面。

「“教師愛”に贈る半身像 豊永氏教学精神に打たれ計画」『台湾日日新報』1943 年 3 月 25 日、夕刊第 2 面。

- 「けふ故浅井訓導の銅像除幕式」『台湾日日新報』1943年8月8日、第3面。
「芝山巖精神の権化 故浅井訓導の胸像完成」『台湾日日新報』1943年8月13日、第3面。
「浅井訓導の胸像除幕式を挙る」『台湾日日新報』1943年9月17日、第3面。

(2) 定期刊行物

作品図版：《文豪魯迅》『アサヒグラフ』1941年11月12日臨時号、15頁。

(3) その他

蒲添生紀念館「蒲添生資料集」

中央研究院台湾史研究所檔案館「蒲添生雕塑作品與文書」

2. 二次資料

(1) 書籍・図録等

蕭瓊瑞『神韻・自信・蒲添生』台北市：雄獅美術、2009年。

『生命的對話：陳澄波與蒲添生』台北市：台北市政府文化局、2012年。

(2) 論文・定期刊行物

蒲宜君「蒲添生《運動系列》人體雕塑研究」臺北市立師範學院視覺藝術研究所碩士論文、2005年。

陳譽仁「藝術的代價－蒲添生戰後初期的政治性銅像與國家贊助者」『雕塑研究』第五期、2011年5月。

【陳夏雨（1917-2000）】

1. 一次資料（1945年以前のもの）

(1) 新聞

「文展三、四部の入選発表台湾から陳夏雨氏」『台湾日日新報』1938年10月11日、第7面。

「陳君文展の彫刻に初入選」『台湾日日新報』1938年10月12日、夕刊第2面。

「陳夏雨君の『裸婦』見事文展に初入選」『大阪毎日新聞 台湾版』1938年10月14日、第6面。

「奉賛美術展入選 陳夏雨」『台湾日日新報』1940年9月28日、第5面。

陳春徳「台陽展合評（評者：林玉山、林林之助、李石樵、陳春徳、蒲添生）」『興南新聞』第4版、1943年4月30日（中央研究院台湾史研究所所蔵）。

2. 二次資料

(1) 書籍・図録等

『陳夏雨雕塑集』台北市：雄獅圖書、1979年。

- 廖雪芳『完美・心象・陳夏雨』台北市：雄獅美術、2002年。
王偉光『陳夏雨的祕密雕塑花園』台北市：藝術家、2005年。
王偉光『臺灣美術全集 33 陳夏雨』台北市：藝術家、2016年。

(2) 論文・定期刊行物

- 「陳夏雨專輯」『雄獅美術』103期、1979年9月。
何真如「陳夏雨雕塑藝術研究」東海大學美術學系碩士論文、2003年。
郭懿萱「陳夏雨的女性雕塑作品初探」『雕塑研究』16期、2016年9月。

【黃清埕（呈/亭）（1913-1943）】

1. 一次資料

(1) 新聞・定期刊行物

- 「顔（ムーブ展）黃清亭作」『台湾日日新報』1938年3月16日、第6面。
野村幸一「ムーブ展評」『台湾日日新報』1938年3月23日、第10面。
「ベーターウン〔※ママ：筆者註〕試作（ムーブ三人展）黃清呈」『新民報』1940年5月15日、第8面。
呂赫若「嗚呼！黃清呈夫婦」『興南新聞』1943年5月17日、第4面。
王白淵「台灣美術運動史」『台北文物』3卷4期、1955年3月。

2. 二次資料

(1) 書籍・図録等

- 『南方紀事之浮世光影』（黃玉珊監督、2005年）
『池東紀事』（黃玉珊監督、2006年）
吉田千鶴子『近代東アジア美術留學生の研究』東京：ゆまに書房、2009年。
『台灣製造／製造台灣』台北市立美術館、2016年。
黃清舜『一生的回憶』澎湖縣馬公市：澎縣文化局、2019年。

【林坤明（1914-1939）】

1. 一次資料

(1) 新聞

- 「美術展新入選者」『東京朝日新聞』1937年8月31日、第7面。
「塑像界の新人林坤明君」『台湾日日新報』1937年9月16日、第5面。

(2) 定期刊行物

- 「林坤明先生我國新進之雕塑家惜今夏客死於日本享年三十有二」『中国文藝』第1卷第4期、1939年12月、54頁。

(3) その他

第三部会展覧会目録：東京文化財研究所編『近代日本アート・カタログ・コレクション 第2期 089 彫塑会／蕃土拉舍／東台彫塑会／復興記念彫塑合同展覧会／東邦彫塑院／第三部会／直土会』東京：ゆまに書房、2008年。

2. 二次資料

(1) 書籍・図録等

葉玉靜『臺灣美術評論全集 林惺嶽』台北市：藝術家、1999年。

『歸郷—林惺嶽創作或回顧展』台中市：台灣美術館、2007年。

彭宇薰『逆境激流：林惺嶽傳』台北市：典藏藝術家庭、2012年。

(2) 論文・定期刊行物

林惺嶽「不堪回首話當年為陳夏雨先生雕塑個展而寫」『藝術家的塑像』百科文化事業、1980年。

【陳在癸（1907-1934）】

卒業制作：『東京美術学校校友会月報』第30巻第1号、1931年4月、44頁。

吳坤煌「陳在癸君を悼む」『台湾文芸』第2巻第4巻、1935年4月、39-41頁。

「陳在癸 聴取書」：「日本共産党台湾民族支部東京特別支部員検挙顛末」（警察庁特別高等課内鮮高等係作成）『現代史資料 22 台湾2』東京：みすず書房、2004年。

吉田千鶴子『近代東アジア美術留學生の研究』東京：ゆまに書房、2009年。

柳書琴『荊棘之道：旅日青年的文學活動與文化抗爭』台北市：聯經、2009年。

【張昆麟（1912-1936）】

「張昆麟像及其背後文字」PH5_014、陳澄波コレクション、中央研究院臺灣史研究所典藏。

『台湾美術展覧会図録』：第六回展（1932年）《ラフレール》、第七回展（1933年）《紅綢に横たわれるシュミーズ女》、第十回展（1936年）《田園風景》。

吉田千鶴子『近代東アジア美術留學生の研究』東京：ゆまに書房、2009年。

【范德煥／倬造／文龍、（1913/1914-1977）】

『東京美術学校 校友会会報』第8、9号、1936年6月、12月。

「教へ子相寄り胸像を贈る」『台湾日日新報』1941年9月15日、第4面。

「恩師に胸像贈呈」『台湾日日新報』1942年2月19日、第2面。

「造型協会展開く」『朝日新聞 台湾版』1941年4月29日、第8面。

王白淵「台湾美術運動史」『台北文物』3巻4期、1955年3月。

王一林等「紀念台灣省籍雕塑家范文龍」『美術』1982年6月。

謝里法「一位雕塑家的出土—大陸上的范文龍就是臺灣造型美術協會的范倬造？」『雄獅美術』第133期、1982年3月。

吉田千鶴子『近代東アジア美術留學生の研究』東京：ゆまに書房、2009年。